※
動きを封じるように、頭に重ねていた右手が、
ゆっくりと下の方へ降りてゆく。
堪えなければならない事とは分かっていた。
けれど、この数日耐えて来た、体の中の疼きが、
もう抗えない所へ来ている事も自覚していた。

「いれば自分でしてるっつーの……ばか」

自分でも言い訳みたいな言葉を口にして、
恐る恐る、敏感な個所へと手を近づける。

指先が、隠れた先端に触れた瞬間。
痺れるような感覚が体を駆け抜ける。
さわ…

ん…!
ぎゅっ

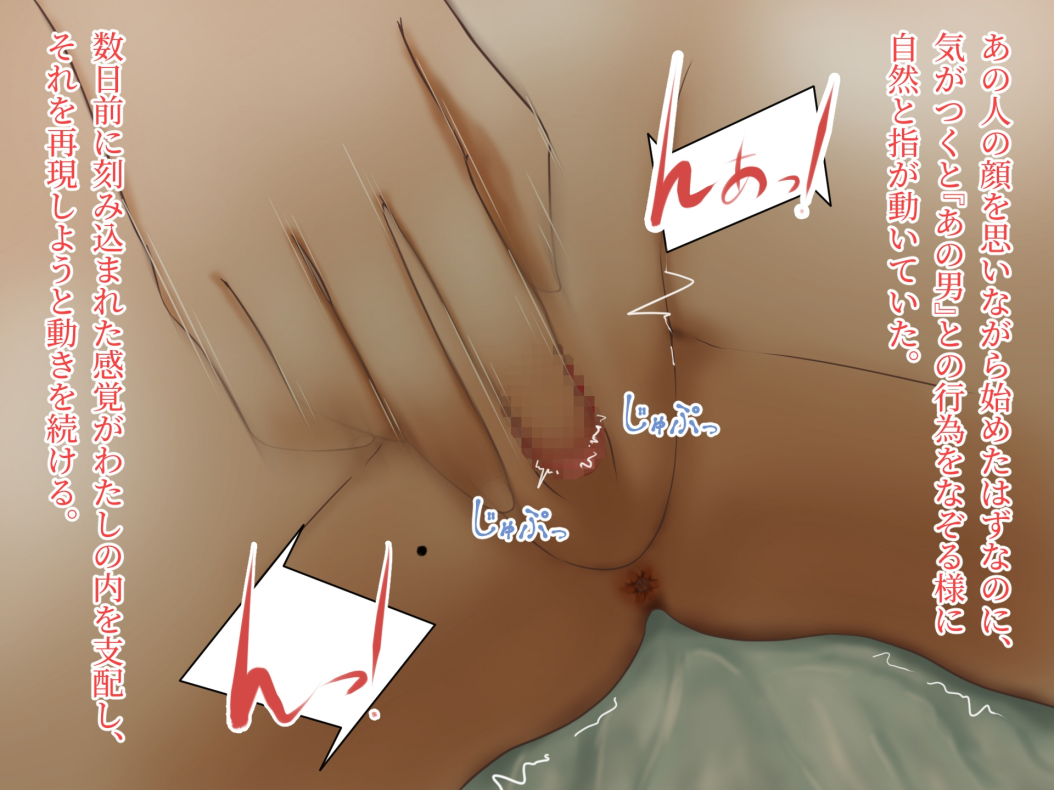
そして、それを合図として、
指先は、わたしの意思などお構い無しに
そこを撫で、擦った。
あ、
ん、

ん、
あ、

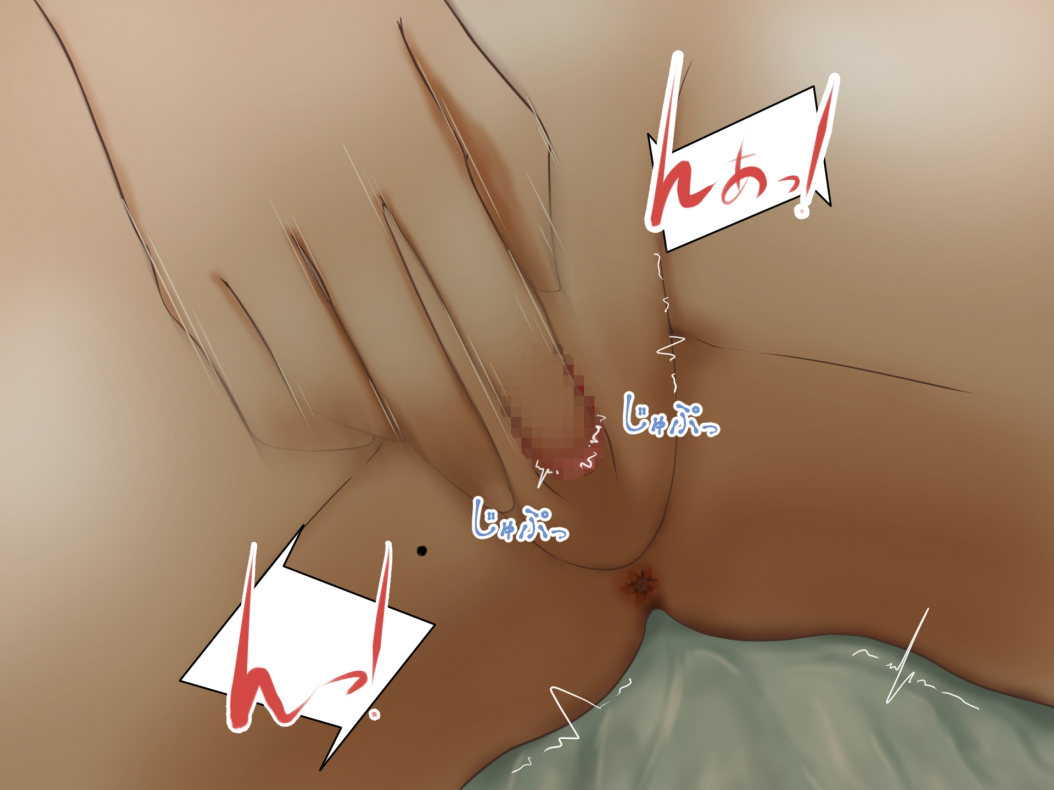
体の中の渇きを癒そうとするように、
指先は更に激しさを増し、
襞の奥へ滑り込んでいく
ちゅく
ちゅく

は
ちゅく
ちゅく
あ!

は
ちゅく
ちゅく
あ!


あの人の顔を思いながら始めたはずなのに、
気がつくと『あの男』との行為をなぞる様に
自然と指が動いていた。
んあっ!
じゅぷっ
じゅぷっ
んっ!
数日前に刻み込まれた感覚がわたしの内を支配し、
それを再現しようと動きを続ける。

んあっ!
じゅぷっ
じゅぷっ
ん…!


んあっ!
じゅぷっ
じゅぷっ
ん…っ!

けれど、どれだけ指を深く挿入しても、
奥底に溜まる疼きにはどうしても届かなかった。
「どう、して……」
自らの手で果てることもできない体に
なったことを思い知らされる。

ただ、あこがれる衝動だけが、
わたしの体の中で膨らんでいった。

※
きっかけは、子供のころに読んだ
一冊の本だった。

そこから様々な魔術に関する書を父にねだり、
この世界の魔術は地、水、火、風。
四種類の要素で構成されることを知り、
歴史や基礎知識を学んでいった。

十五才になった時、
魔術への興味を失っていない自分の姿を見て、
王都の魔術師が家庭教師として招かれた。

名のある、とまではいかないものの、
これまで独学のみだった
僕の好奇心を満たすには十分だった。

二十才となり、王立の魔術学院で学びたいと父に告げたとき、二つ返事で快諾してくれた。

四男である僕の厄介払いと、上手くいけば一族の箔付けになると思ったのだろう。

学費や生活に困らない金銭を得られることは、辺境の一角であるとはいえ、農耕が盛んで王国の食糧庫と呼ばれる領地を持つ家に産まれた事は僕にとっては僥倖だった。

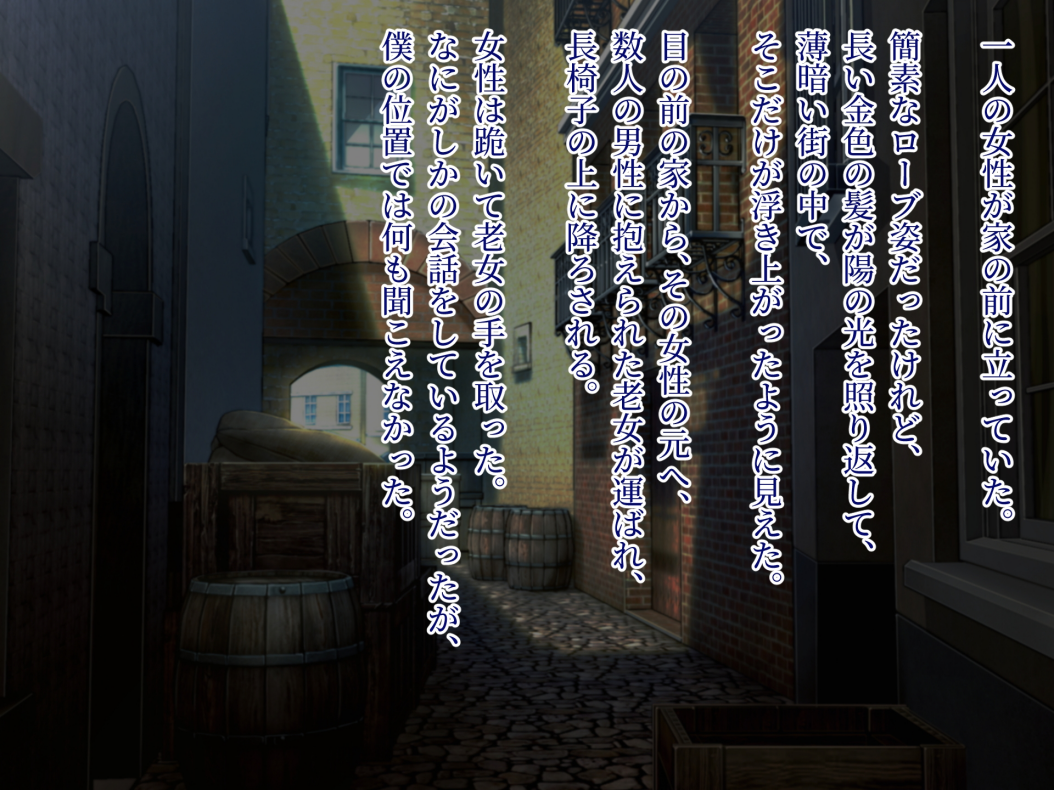
そして、希望をもって僕は王都に旅立った。

当初は、王都の街並みや人々の多さに驚き、
学院で受ける講義や蔵書に圧倒されたが、
僕は好奇心の赴くままにそれらを貪り続けた。
そうして夢中に過ごした半年が経ち、
王都での生活にも慣れ、
教師にも名前を覚えられ始めた頃だった。
ある魔術理論の考察に没頭していた僕は、
知らないうちに王都の下層地域に
迷い込んでいた。

大勢の人々が集まれば、
大小なりとも富裕の差は出てくるものだ、
城壁に近づく程にその傾向は強まってゆく。

（こんな所に用は無い）

何かも分からないゴミが散乱する道を一瞥して
踵を返しかけた僕は、ふと足を止めた。


一人の女性が家の前に立っていた。
簡素なローブ姿だったけれど、
長い金色の髪が陽の光を照り返して、
薄暗い街の中で、
そこだけが浮き上がったように見えた。
目の前の家から、その女性の元へ、
数人の男性に抱えられた老女が運ばれ、
長椅子の上に降ろされる。
女性は跪いて老女の手を取った。
なにがしかの会話をしているようだったが、
僕の位置では何も聞こえなかった。

ひとしきり話が終わったのか、
女性は袋のような鞄から布の巻物を取り出し、
老女の足に広げ被せる。

ゆっくりと布の真ん中に手を置くと、
天を仰ぐように顔を上げた。

ふわりと光が浮かび上がる。
魔術の光だった。
魔術を扱うものだけが見ることができる、
力の表出。

僕はそれを食い入るように見つめた。
光を見れば、行使される魔術がどの属性で、
どの系統であるか分かる、はずだった。

けれど、いま僕の目の前で行使されている
魔術の放つ光は、全く見たことの無いものだった。

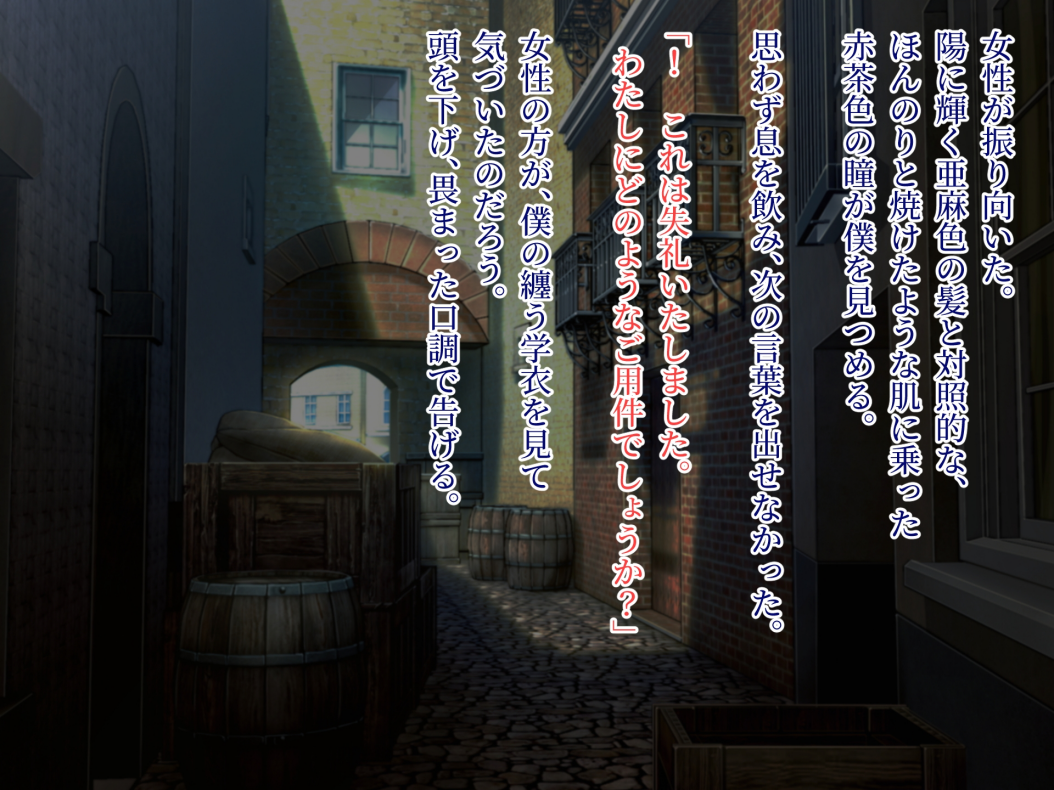
光が柔らかな布のように老女を包み込み、
吸い込まれるように消えていく。

その途端。
老女は、それまで生気なく男たちに
運ばれていたのが嘘のように起き上がった。

老女や男たちが何度も女性に対して頭を下げ、
お礼をしていた。
女性は、戸惑うようにお礼を返して、
その場を離れていく。

「あの……」
僕は、思わず女性に話しかけていた。

「はい……？」

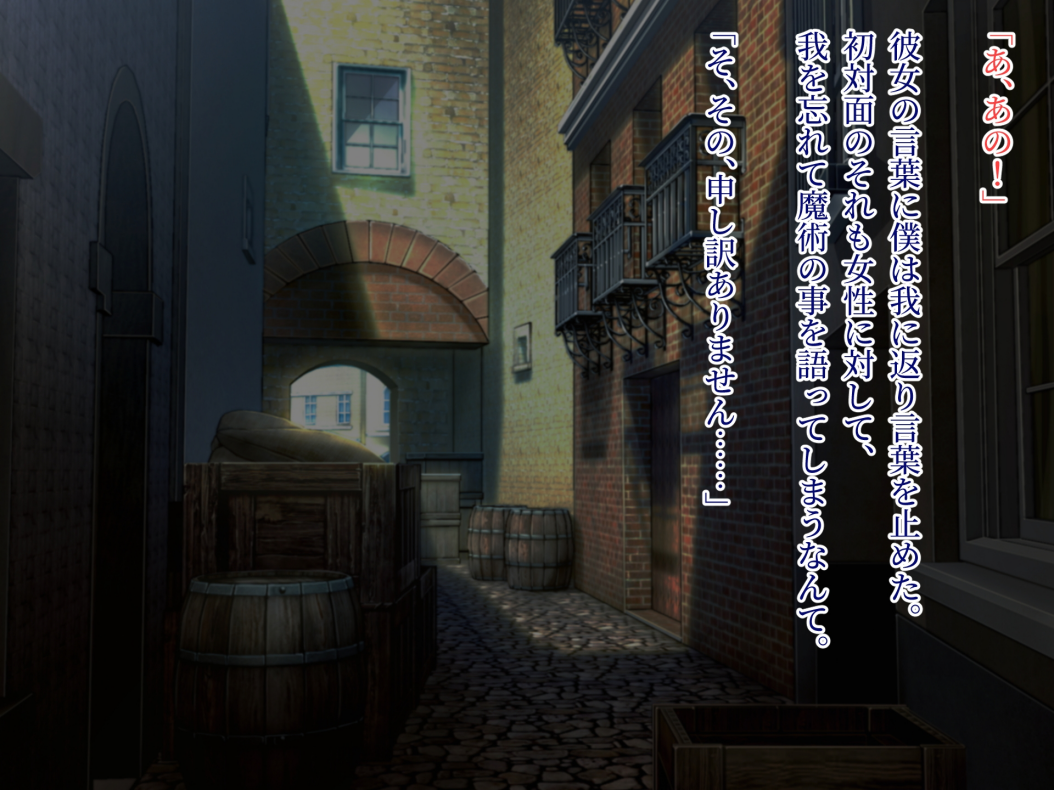

女性が振り向いた。
陽に輝く亜麻色の髪と対照的な、
ほんのりと焼けたような肌に乗った
赤茶色の瞳が僕を見つめる。
思わず息を飲み、次の言葉を出せなかった。
「！　これは失礼いたしました。
わたしにどのようなご用件でしょうか？」
女性の方が、僕の纏う学衣を見て
気づいたのだろう。
頭を下げ、畏まった口調で告げる。

この街で学院の関係者であることは
（例え学士であったとしても）
敬意を受ける対象であることと同じだった。
それは、この下層街でも同様なのだろう。
故郷にいた時ですら、
こんなに畏まられたことの無い僕は、
この街の人々の対応には未だ慣れなかった。
「いえ、突然すみません。
その、貴女が使われていた魔術なのですが……」
「学士様の前で、市井の術をお見せしてしまい、
お目汚し申し訳……」

「そんな事はありません！」
その卑屈すぎるへりくだり方に、
思わず僕は声を荒げてしまう。

「あんな術式を見たのは初めてです。
二つの素因が組み合わされているように
見えましたが、あの組み合わせは互いを
相殺するとして否定されたもののはず。
ですが、先ほどのものは互いに補完し合って
いるように見えました。
なにより……」

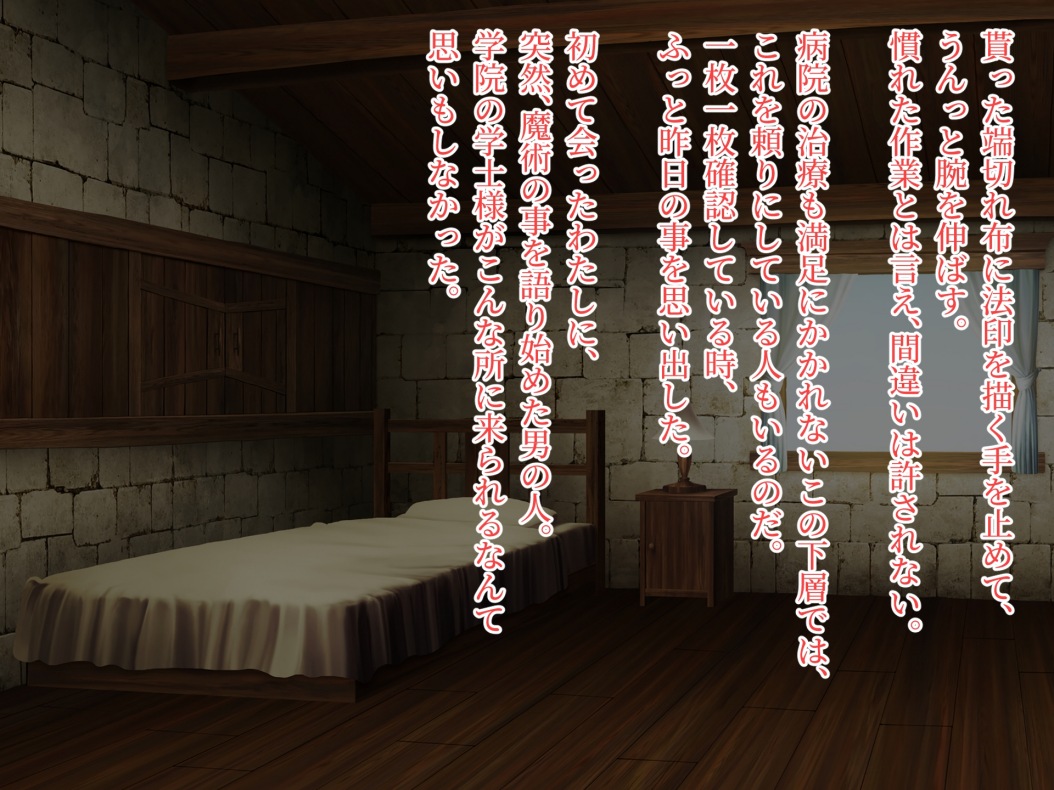
僕は、先程まで悩んでいた問題も忘れて、
矢継ぎ早に言葉を重ねる。


「あ、あの！」
彼女の言葉に僕は我に返り言葉を止めた。
初対面のそれも女性に対して、
我を忘れて魔術の事を語ってしまうなんて。
「そ、その、申し訳ありません……」

「本当に、魔術を知ることがお好きなのですね」
向けられた笑顔に僕はまた言葉を出せず、
恥ずかしさで顔を俯けた。

「学士様のような方に見ていただけるのであれば、
父も喜ぶでしょう。
こんな所では落ち着きませんので、
私の家にいらしてください。
父の記録をお見せいたします」
それが、彼女。
セリシアとの出会いだった。

※
「これくらいで良いかしら」


貰った端切れ布に法印を描く手を止めて、
うんっと腕を伸ばす。
慣れた作業とは言え、間違いは許されない。
病院の治療も満足にかかれないこの下層では、
これを頼りにしている人もいるのだ。
一枚一枚確認している時、
ふっと昨日の事を思い出した。
初めて会ったわたしに、
突然、魔術の事を語り始めた男の人。
学院の学士様がこんな所に来られるなんて
思いもしなかった。

だけど、その態度はとても真摯で。
わたしの使う、父の残した魔術を良く見て
知ろうとしてくれていた。
わたしはそれがとても誇らしくて、
思わずあの人を家まで誘ってしまっていた。
父の残した成果を自慢したかったのだ。
思い返せばどんなに大胆なことを
してしまっていたのだろう。

でも、父の記録を読みふけるあの人の後ろ姿。
まるで父が帰ってきたようだった。
母にもわたしにも不器用な接し方しか
できなかったけど、
人のための魔術を目指していた父に。
また来てくれると言っていた。
その日を心待ちにしている自分に気づいて、
急に恥ずかしくなった。

※
それから、講義の合間を見ては
セリシアの家を訪れ、
彼女の父親が残した魔術研究の記録を
読みふけった。

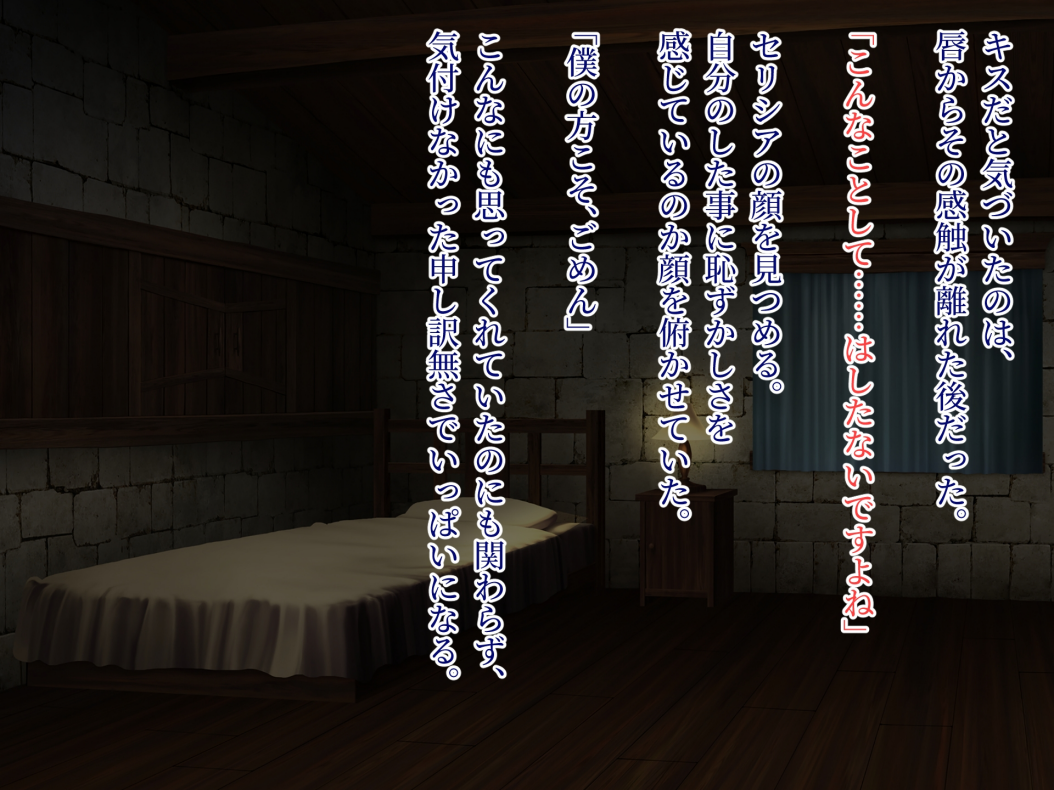
そこに記録されていたのは、
それぞれ会い交わることの無いとされている、
四種の魔術要素を横断し組み合わせた、
学院で学ぶものとは異なる新しい体系の魔術。
と言えるものだった。
彼女自身の魔術に対する造詣も深く、
古書の記述に対する解釈論のやり取りは、
同級の学院生と行うものとは
比較にならないほど高度で、
僕と同じくらいの歳とは思えないものだった。
そんな彼女に惹かれないと言えば嘘になる。

何度かためらいながら数か月を過ごし、
あと数日で彼女の誕生日であることを知った僕は、
当たり前になった彼女の家での夕食の終わり、
贈り物と共に告白をした。

「もう、余り待たせるものではありませんよ」

茶化すようにそう言って
答え返した彼女を僕はゆっくりと抱きしめた。

「わたしで良ければ」
彼女の腕が僕の背中に回る。
その感触に戸惑っていると、
僕の唇が唐突に柔らかいもので包まれる。


キスだと気づいたのは、
唇からその感触が離れた後だった。
「こんなことして……はしたないですよね」
セリシアの顔を見つめる。
自分のした事に恥ずかしさを
感じているのか顔を俯かせていた。
「僕の方こそ、ごめん」
こんなにも思ってくれていたのにも関わらず、
気付けなかった申し訳無さでいっぱいになる。

どちらともなしに服を脱ぎ捨て、向き合った。
改めて彼女の体を抱きしめる。
気にしていないと伝えるように
後ろ髪をゆっくりと撫でつけてから、
僕の方から改めてキスをした。

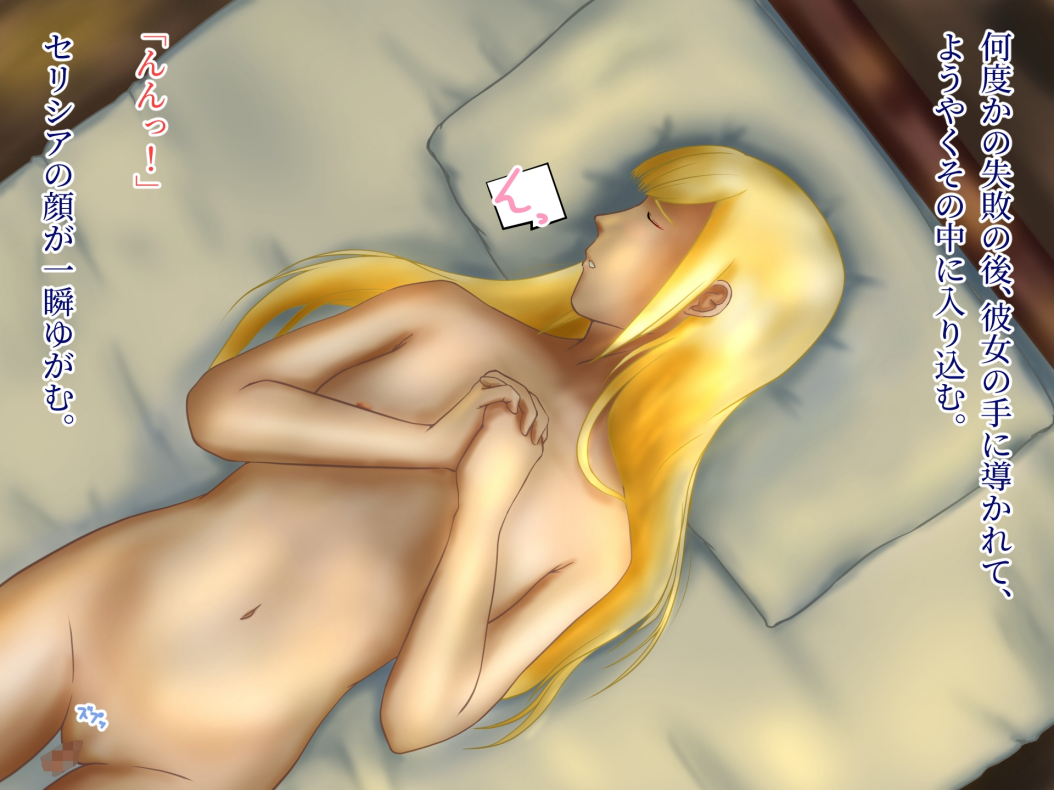
セリシアは体を隠すように胸元で手を組み、
ベッドに横たわる。
いつもの微笑みが僕を見つめた。
初めて見た彼女の体に、
先ほどまで感じていたものと
比較にならない緊張が僕の心を包む。

「初めてだから、無作法があったらごめんなさい」
「その、僕だって初めてなので」
申し訳なさそうに告げるセリシアの言葉に、
僕は緊張を隠すように冗談めかして答えた。

腕の中にいるセリシアを前にして、
体の震えを彼女に悟られないよう
全身を抑えつけることに集中する。

壊れそうなガラス細工に
触れようとするように、
ゆっくりと彼女の体の下の方へ
手を動かしていく。
僕の手がお尻の辺りに触れると、
彼女の体が驚いたように小さく震えた。

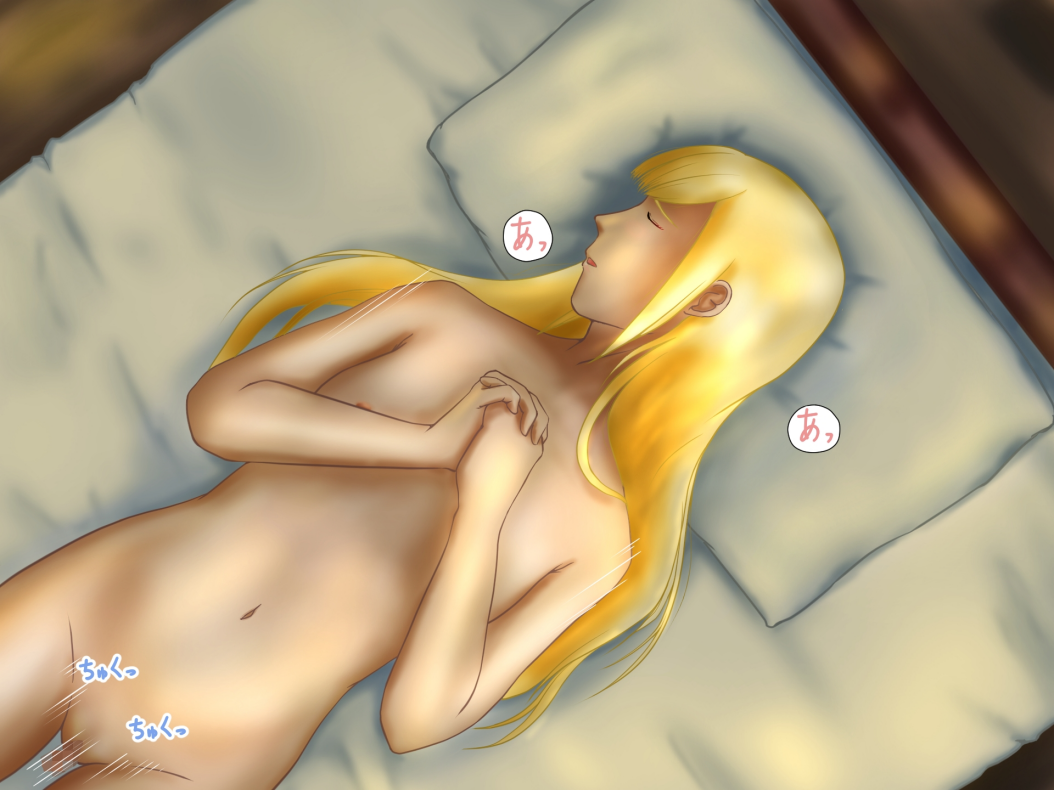
「大丈夫だから」
そう微笑むセリシアの姿を見た瞬間、
これまで堪えて来たものが
押し流されたかのように
僕のモノが昂ぶる。

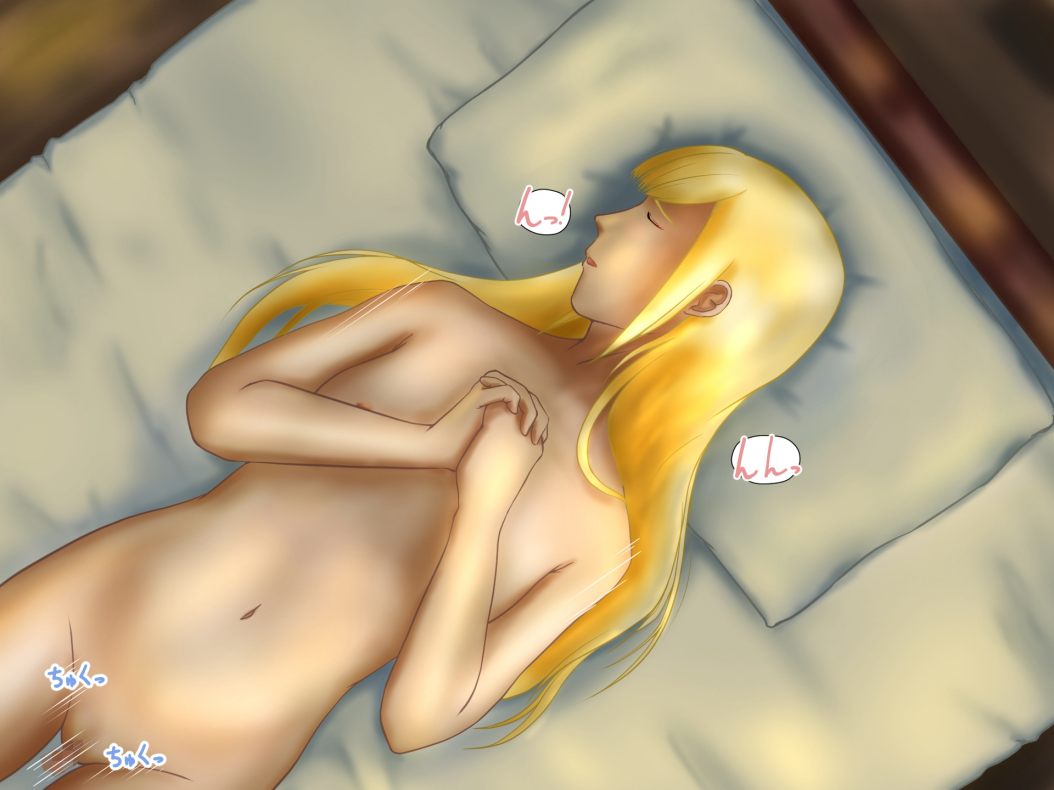

何度かの失敗の後、彼女の手に導かれて、
ようやくその中に入り込む。
「んんっ！」
セリシアの顔が一瞬ゆがむ。

「大…丈夫？」
僕は慌てて自分のモノを抜いた。

僕のうろたえた声に、セリシアは微笑み返す。
「はい、続けてください」

彼女の体の中から、激しい鼓動が聞こえた。
硬さを保ったモノを再び彼女の中へ挿入する。
熱を持ったものが僕を包み込む。
初めての感触と、
彼女と一つとなったことの感動で、
僕はしばらく動けなかった。
んんっ
ジュブ


あっ
あっ
ちゅくっ
ちゅくっ

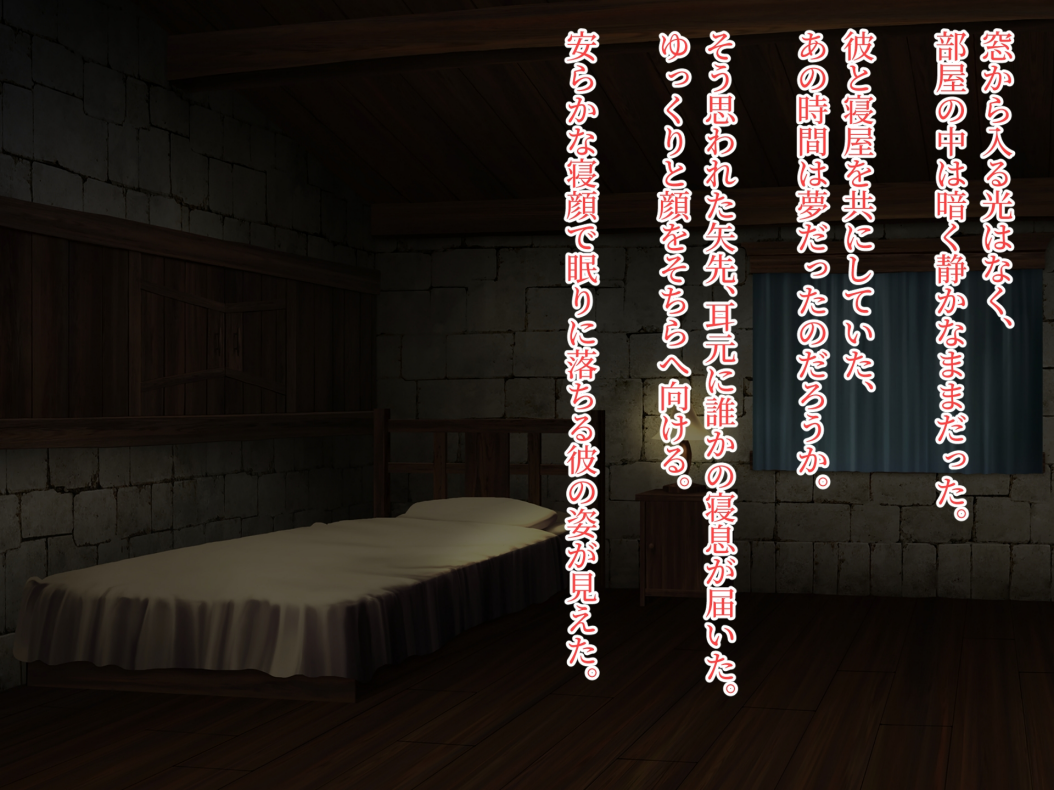

んっ
んんっ
ちゅくっ
ちゅくっ

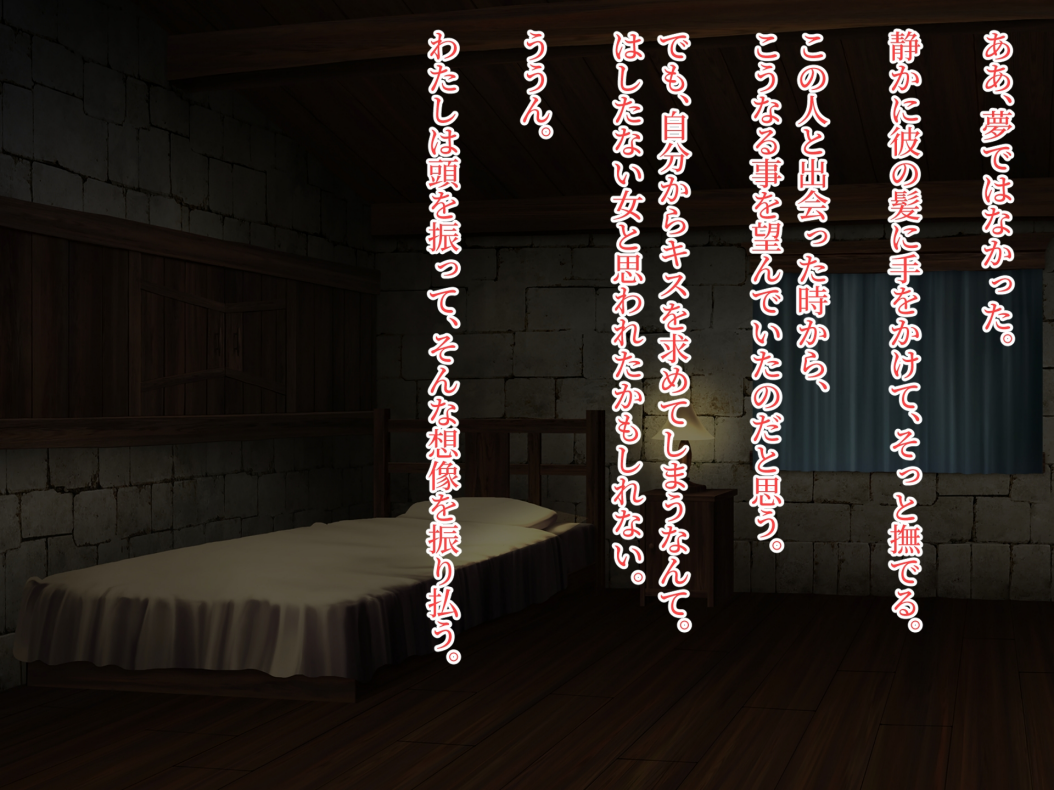
だけど、それも束の間。
僅かに腰を引いた途端、
彼女の内側が激しく絡みつき
僕のモノを絞り上げる。
ん…っ
あぁっ
「あぁっ！」
堪える隙も無く吐き出され、
すぐに果ててしまった。
ドクッ
ドクッ

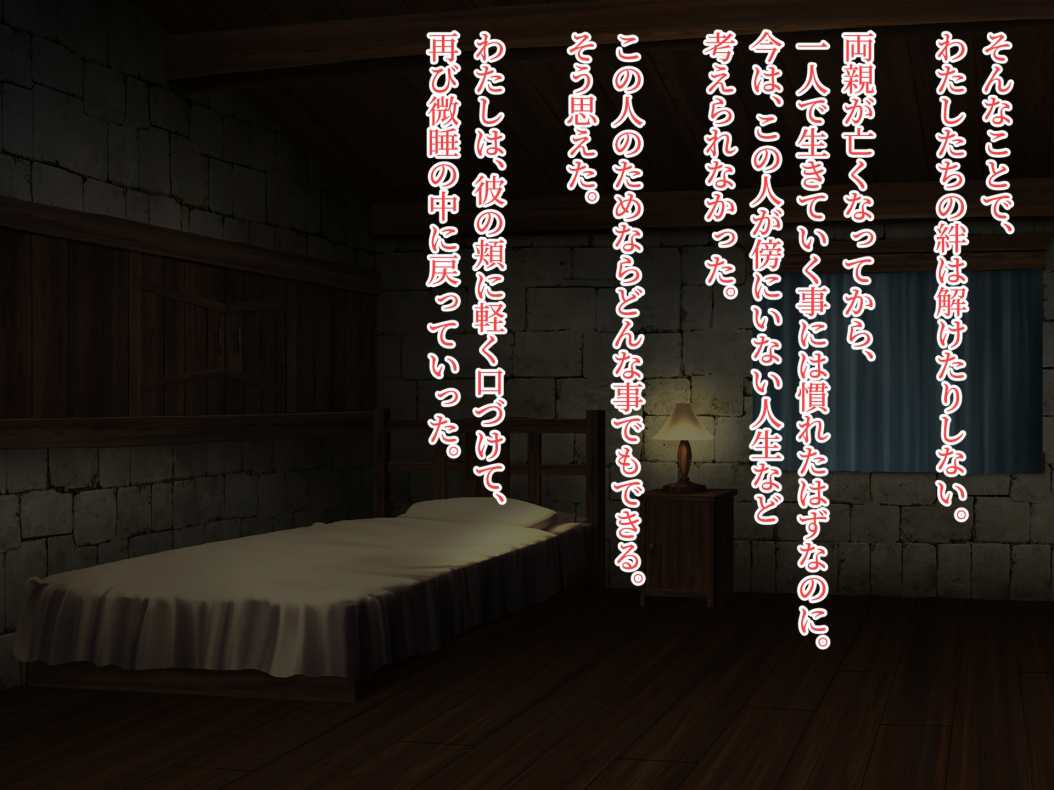
「ごめん」
ほとんど何もできなかった自分が情け無く思え、
思わず謝る言葉が出た。

「わたしは、あなたとこうしていられるだけでいいんです」
セリシアが僕を抱き寄せる。
僕は、その柔らかい感触に身を委ねた。

※
不意に微睡みが解けた。


窓から入る光はなく、
部屋の中は暗く静かなままだった。
彼と寝屋を共にしていた、
あの時間は夢だったのだろうか。
そう思われた矢先、耳元に誰かの寝息が届いた。
ゆっくりと顔をそちらへ向ける。
安らかな寝顔で眠りに落ちる彼の姿が見えた。


ああ、夢ではなかった。
静かに彼の髪に手をかけて、そっと撫でる。
この人と出会った時から、
こうなる事を望んでいたのだと思う。
でも、自分からキスを求めてしまうなんて。
はしたない女と思われたかもしれない。
ううん。
わたしは頭を振って、そんな想像を振り払う。


そんなことで、
わたしたちの絆は解けたりしない。
両親が亡くなってから、
一人で生きていく事には慣れたはずなのに。
今は、この人が傍にいない人生など
考えられなかった。
この人のためならどんな事でもできる。
そう思えた。
わたしは、彼の頬に軽く口づけて、
再び微睡の中に戻っていった。

※
それは講義が終わり、
大書庫へと向かう廊下の途中だった。

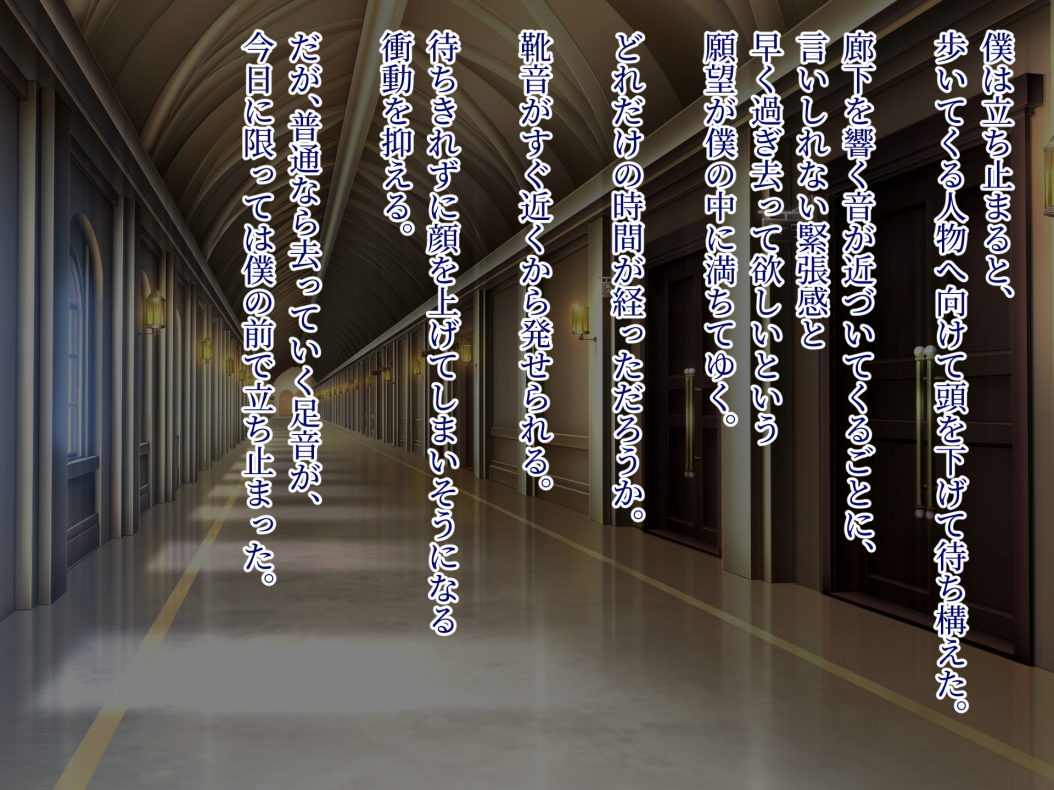
向こう側から紫の学衣をまとった
初老の人物が歩いてくる。

一瞬目の前の事が認識できず、
続けて緊張が体を駆け抜ける。

紫の学衣は、学院で五人しかいない
最高位にあたり、魔術を極めた
賢者と呼ばれる存在だった。

いずれも老人と言っていい年齢であり、
自らの研究所に籠っているため、
そう滅多に出会うようなことはない。

学院の中で賢者は神に等しい存在だった。


僕は立ち止まると、
歩いてくる人物へ向けて頭を下げて待ち構えた。
廊下を響く音が近づいてくるごとに、
言いしれない緊張感と
早く過ぎ去って欲しいという
願望が僕の中に満ちてゆく。
どれだけの時間が経っただろうか。
靴音がすぐ近くから発せられる。
待ちきれずに顔を上げてしまいそうになる
衝動を抑える。
だが、普通なら去っていく足音が、
今日に限っては僕の前で立ち止まった。

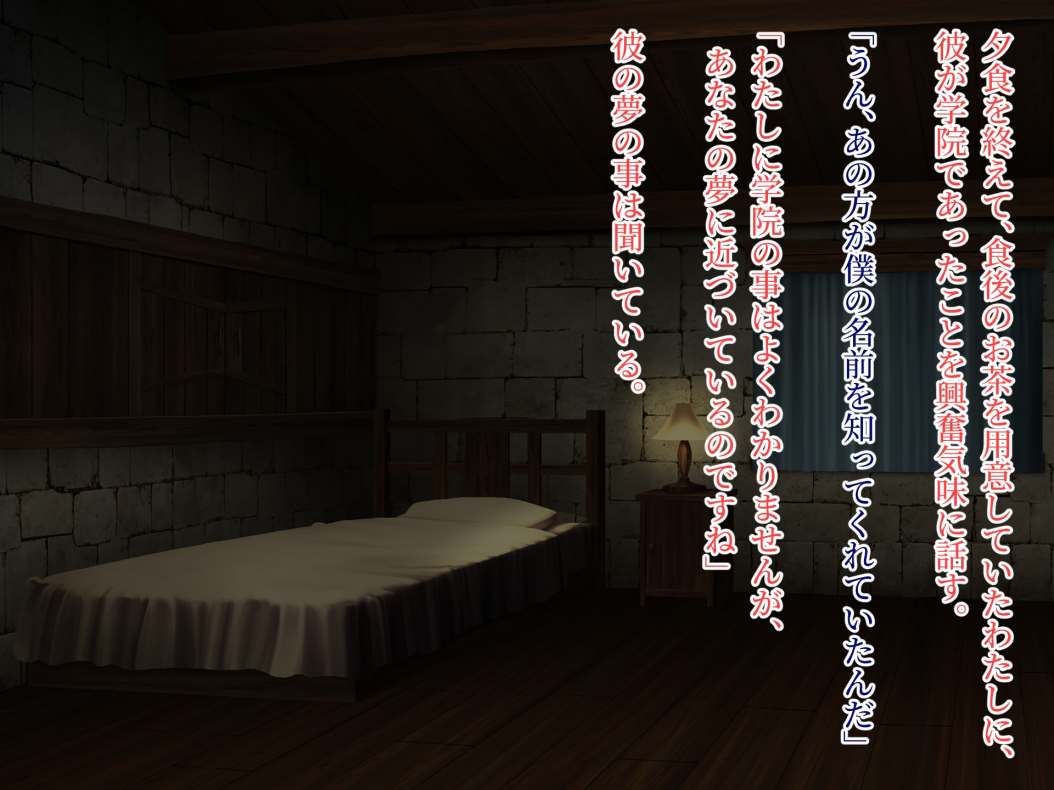
「君が、カルノ君かね？」

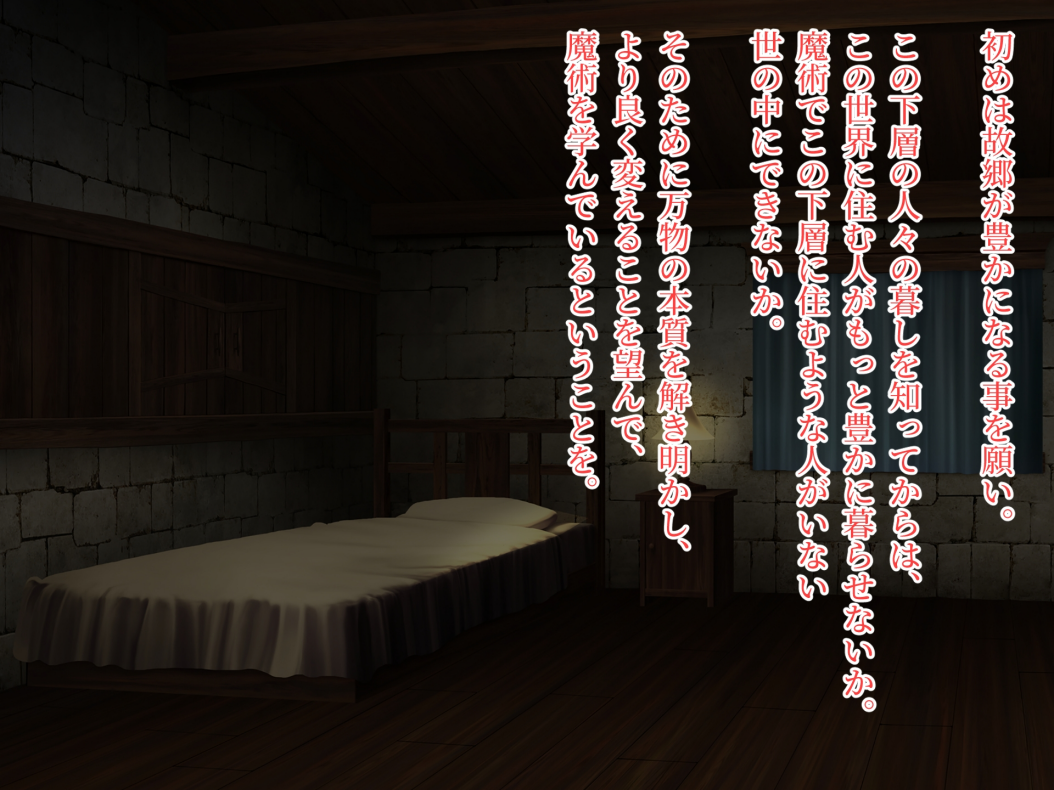
掛けられた声に思わず頭を上げる。
「は…い」
何事が起ったのか分からず、
呆けたような言葉を返す。
目の前に立っていたのは、
僕が学ぶ、魔術の学位の最高峰。
賢者と呼ばれる人物だった。
一度だけ、遠目で見たときには
老いた印象だったが、
実際に目にすると肌は艶やかで精気に満ち、
年下であるはずの故郷の父の方が
老けているように思えた。

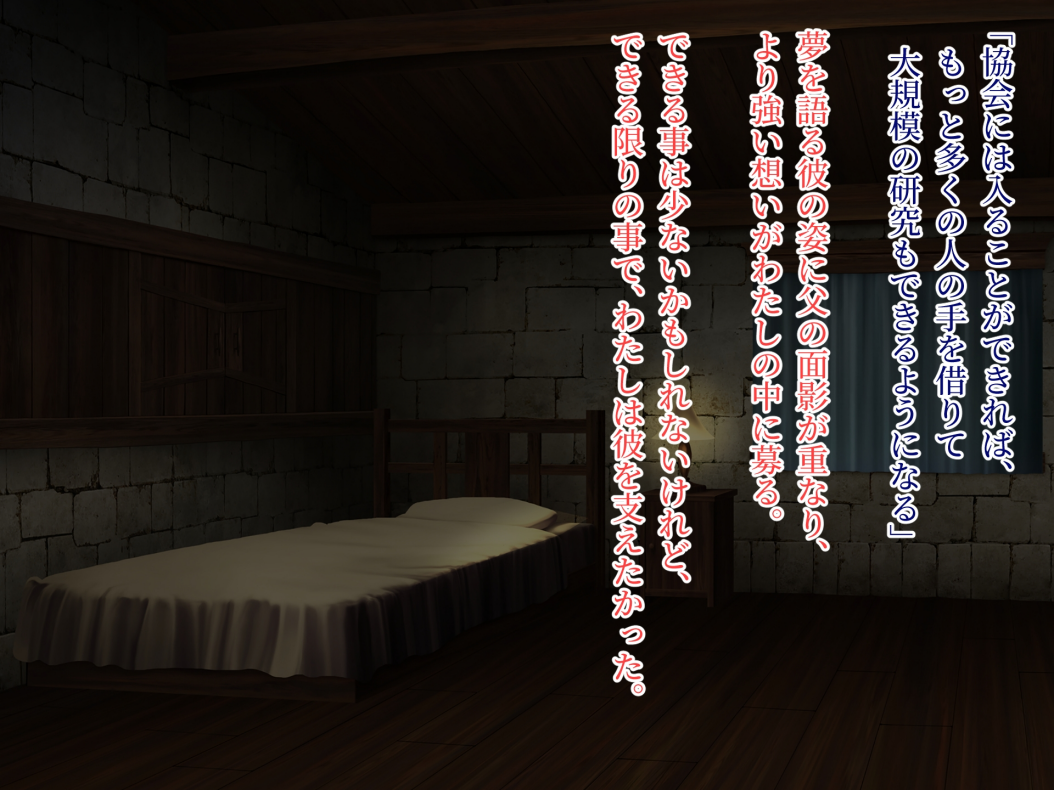
「ザヴロフ君から聞いている。
目覚ましい才能を持った若者がいるとね」
学んでいる教授が僕の事を評価し
伝えてくれていることだけでなく、
賢者から僕の名前が告げられることが
誇らしかった。
「いえ、私などまだまだです」
「己の知に至りをつくらず、
この先も有望なようだ」
「ありがとうございます」

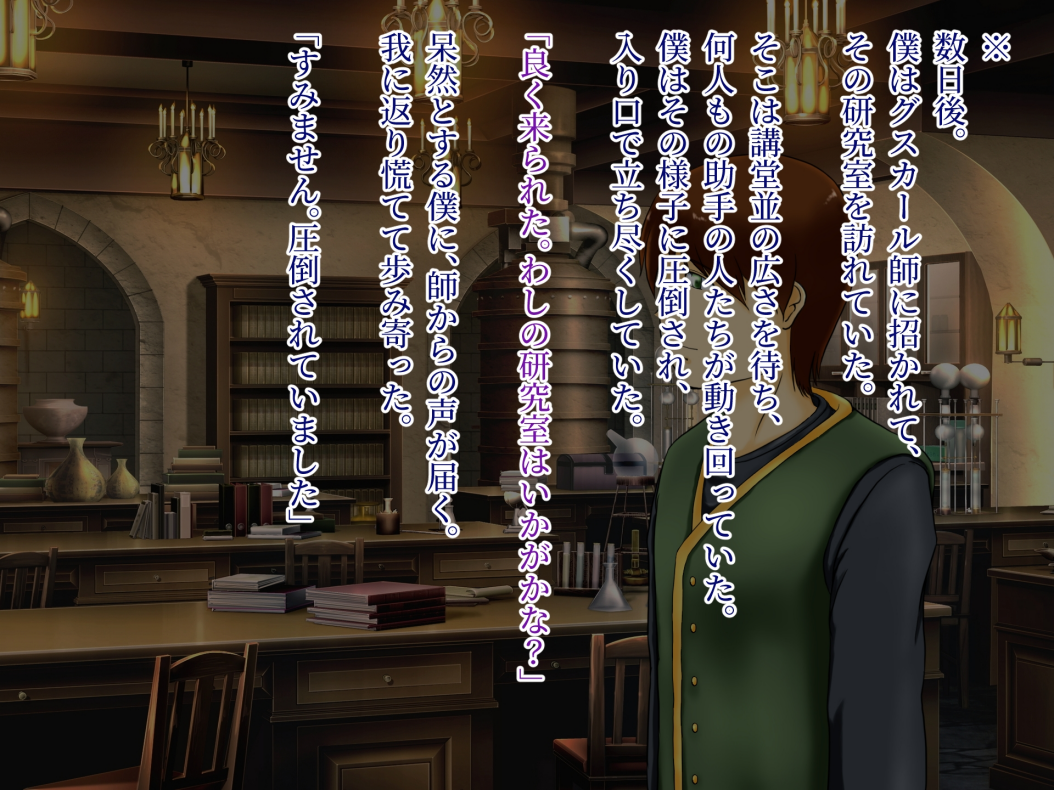
「グスカール様、そろそろ次のお時間が」
脇に立つ従者が耳打ちする。
「そうか、残念だがここまでのようだ。
今度、私の研究所へ招待しよう」
「光栄です」
「うむ」
僕は、思わず歓喜の叫びが出そうになるのを
我慢しながら、
去って行く賢者の後ろ姿を見送った。

※
「賢者様が？」


夕食を終えて、食後のお茶を用意していたわたしに、
彼が学院であったことを興奮気味に話す。
「うん、あの方が僕の名前を知ってくれていたんだ」
「わたしに学院の事はよくわかりませんが、
あなたの夢に近づいているのですね」
彼の夢の事は聞いている。

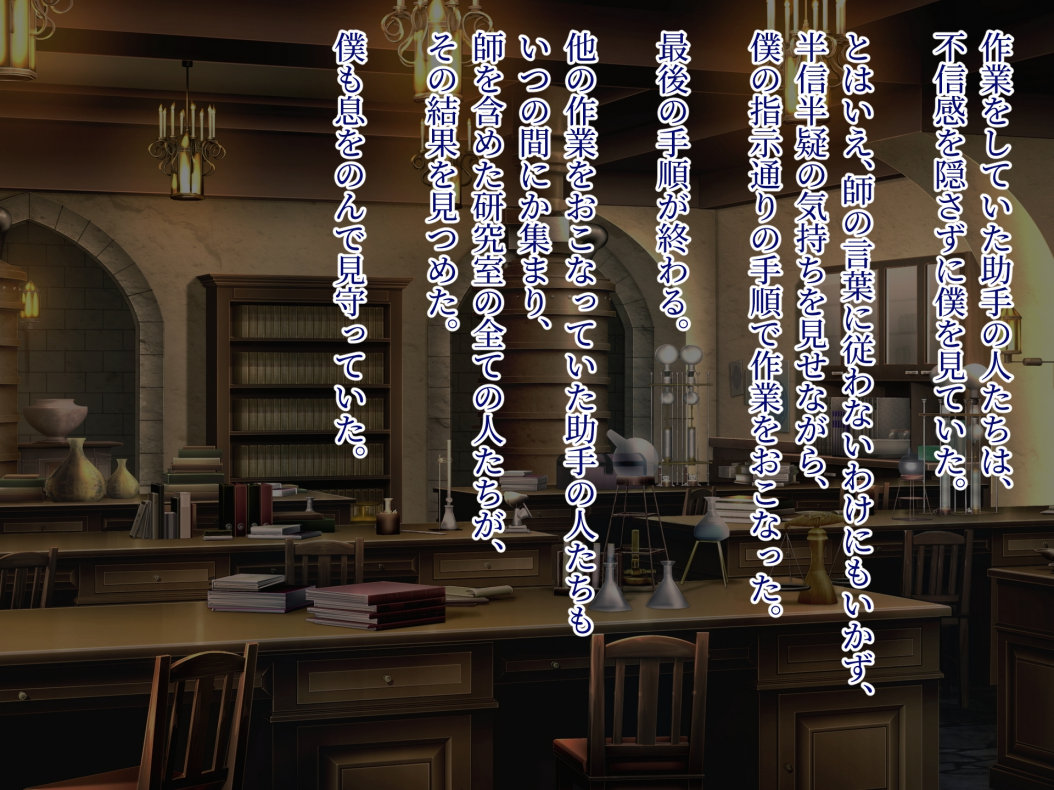

初めは故郷が豊かになる事を願い。
この下層の人々の暮しを知ってからは、
この世界に住む人がもっと豊かに暮らせないか。
魔術でこの下層に住むような人がいない
世の中にできないか。
そのために万物の本質を解き明かし、
より良く変えることを望んで、
魔術を学んでいるということを。


「協会には入ることができれば、
もっと多くの人の手を借りて
大規模の研究もできるようになる」
夢を語る彼の姿に父の面影が重なり、
より強い想いがわたしの中に募る。
できる事は少ないかもしれないけれど、
できる限りの事で、わたしは彼を支えたかった。


※
数日後。
僕はグスカール師に招かれて、
その研究室を訪れていた。
そこは講堂並の広さを待ち、
何人もの助手の人たちが動き回っていた。
僕はその様子に圧倒され、
入り口で立ち尽くしていた。
「良く来られた。わしの研究室はいかがかな？」
呆然とする僕に、師からの声が届く。
我に返り慌てて歩み寄った。
「すみません。圧倒されていました」

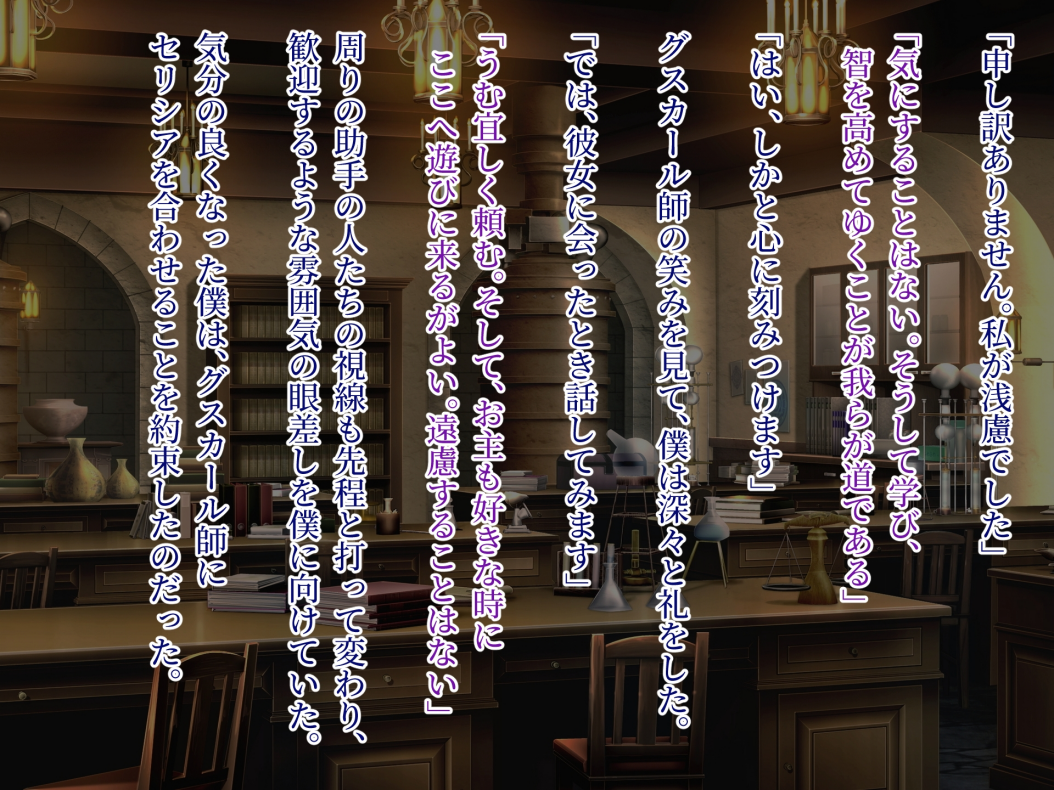
「この先、お主も自分の研究室を持つことになれば、
これでも物足りぬと思うようになるじゃろう」
「そうなのでしょうか……私も努力致します」
「まあ、気を張らずともよい」
そう言って笑う師について、
研究室を案内してもらう。
半分ほどを回り、室内の中央にたどり着く。
ひときわ真剣な眼差しの助手の人たちが
円卓を取り囲み、
法印の形成作業をおこなっていた。
「あれはもしかして、二要素の結合でしょうか？」

「うむ、よく気がついた。
しかし、なかなか上手く行かなくてな」
僕はひとしきり作業を眺めた。
そして、うまくいかない理由が見えた。
「それなら、第五と第八の手順を入れ替えてみてはいかがでしょう？」
「ほう？」
師は考え込むように顔を伏せた。
しばしの後、不意に顔を上げ、助手の人たちを見やる。
「彼の言うようにやってみなさい」

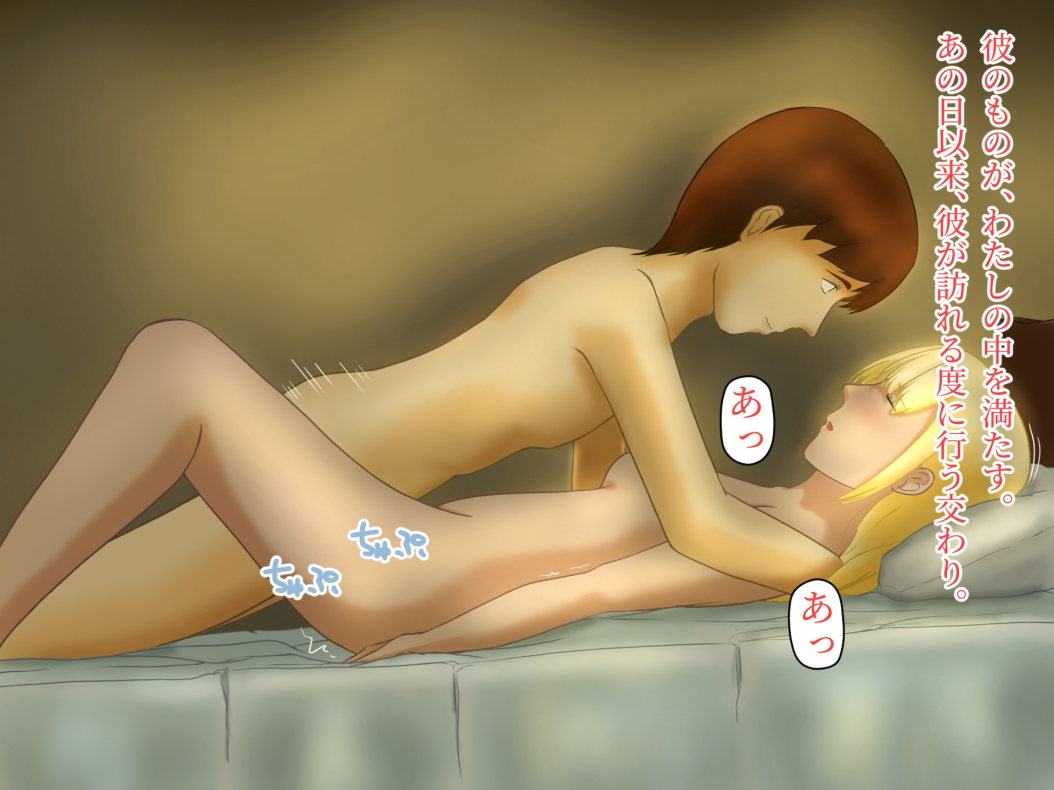

作業をしていた助手の人たちは、
不信感を隠さずに僕を見ていた。
とはいえ、師の言葉に従わないわけにもいかず、
半信半疑の気持ちを見せながら、
僕の指示通りの手順で作業をおこなった。
最後の手順が終わる。
他の作業をおこなっていた助手の人たちも
いつの間にか集まり、
師を含めた研究室の全ての人たちが、
その結果を見つめた。
僕も息をのんで見守っていた。

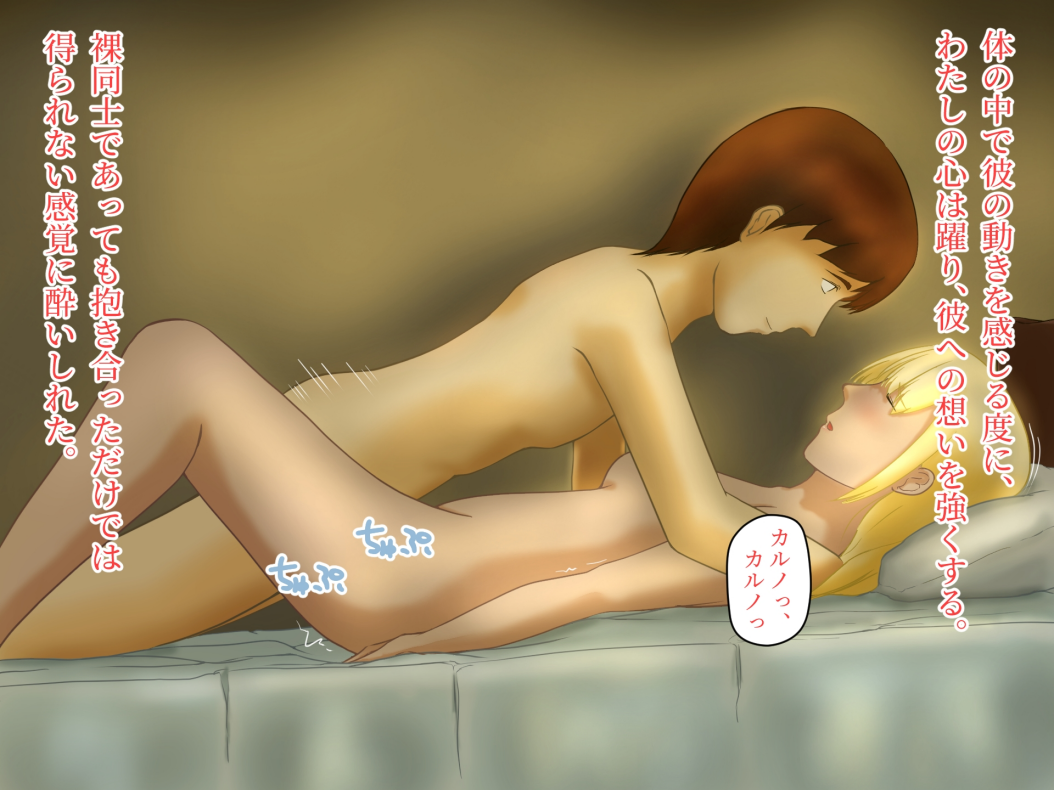
何の反応もないかと思われた矢先。
魔力の光がひときわ強く輝きだし、
次第に安定した光を放っていく。
「おぉ」
周りから歓声が上がる。
僕も自分の言ったことが失敗せず
済んだことに安堵した。
「君は、これについて研究していたのかね？」
「いえ、これは私の考えたことではなく、
市井の研究者の方の理論を応用しただけです」

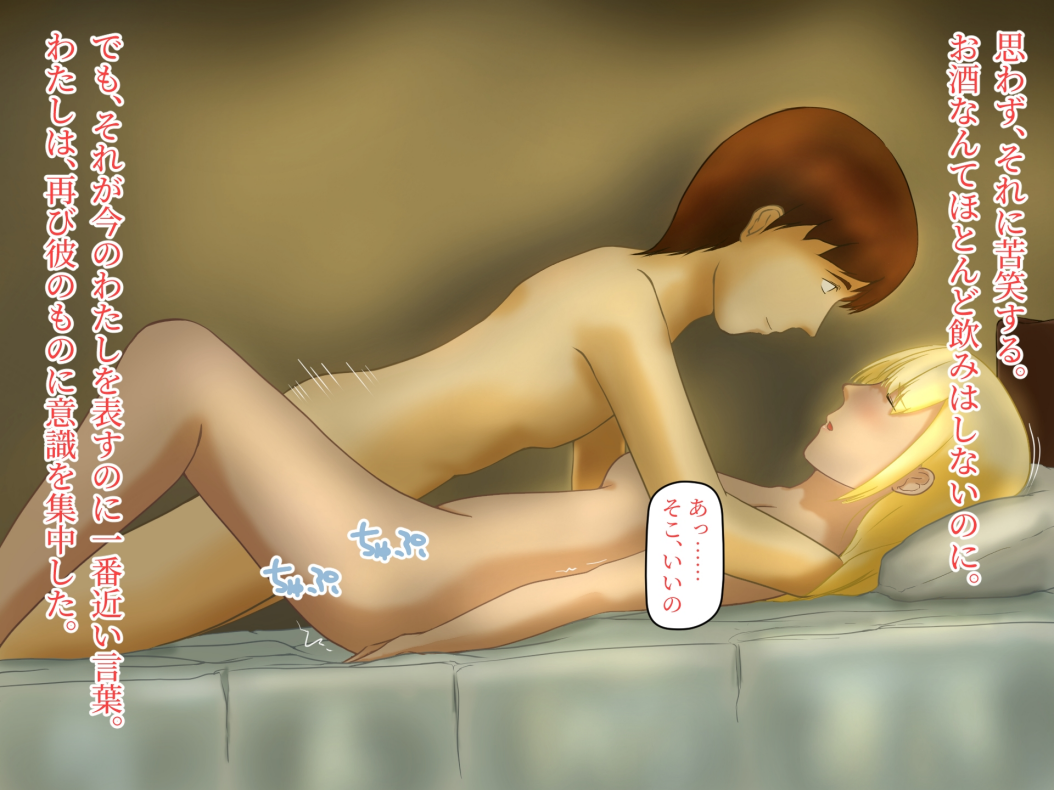
「市井の？　一度、話を伺いたいものだ」
「その方は、残念ながらもう亡くなられていて、
娘さんから見せていただいたのです」
「そうか、その娘さんというのは？」
「その人も魔術の研究をされていて、
私も敵わないほどです」
「なるほど、一度話をしてみたいものだ」
「いえ、グスカール様がお会いに
なられるような程では」
「何を言っておる。例え市井にあろうと智は智。
現にお主はその智に助けられておる」
言い返しようのない答えに、
僕は自分の浅はかさを思い知らされる。

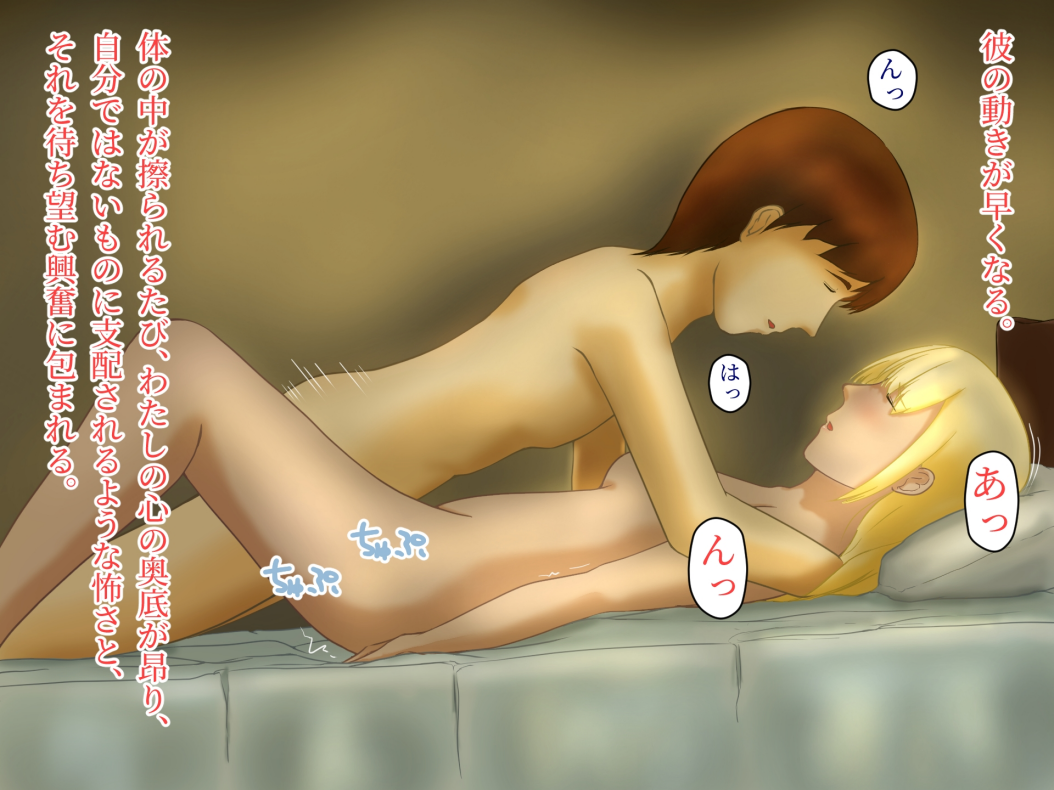


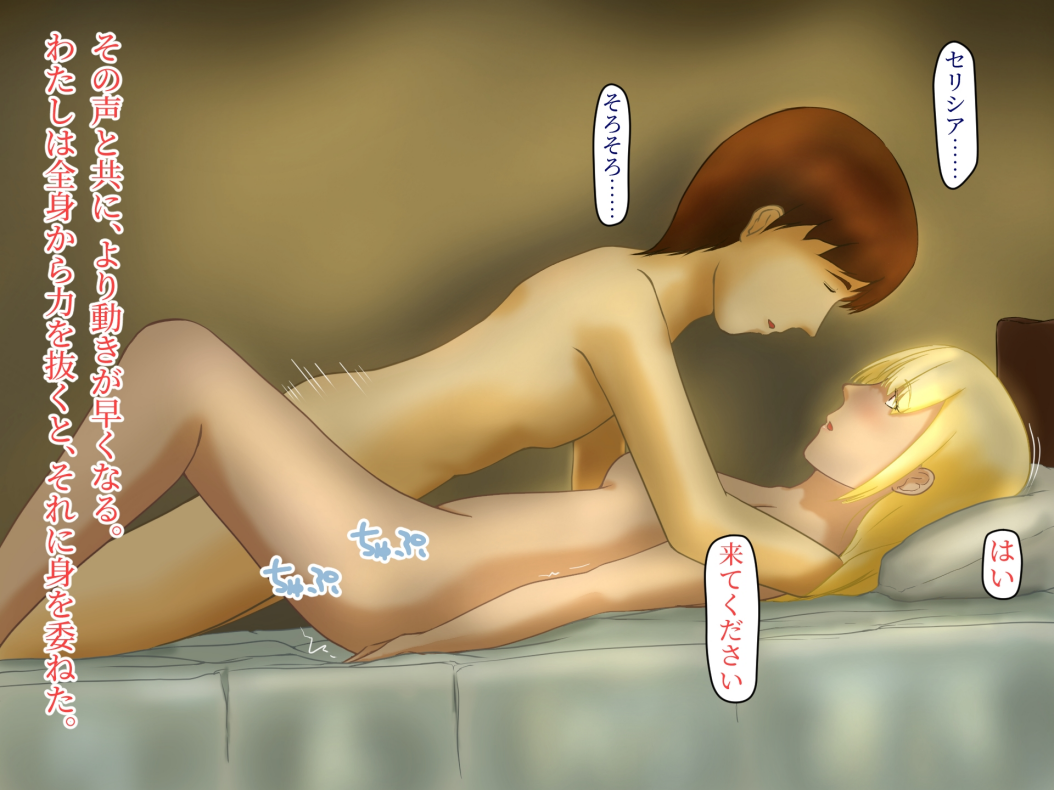
「申し訳ありません。私が浅慮でした」
「気にすることはない。そうして学び、智を高めてゆくことが我らが道である」
「はい、しかと心に刻みつけます」
グスカール師の笑みを見て、僕は深々と礼をした。
「では、彼女に会ったとき話してみます」
「うむ宜しく頼む。そして、お主も好きな時にここへ遊びに来るがよい。遠慮することはない」
周りの助手の人たちの視線も先程と打って変わり、歓迎するような雰囲気の眼差しを僕に向けていた。
気分の良くなった僕は、グスカール師にセリシアを合わせることを約束したのだった。


彼のものが、わたしの中を満たす。
あの日以来、彼が訪れる度に行う交わり。
あっ
あっ
ぴちゃ
ぴちゃ

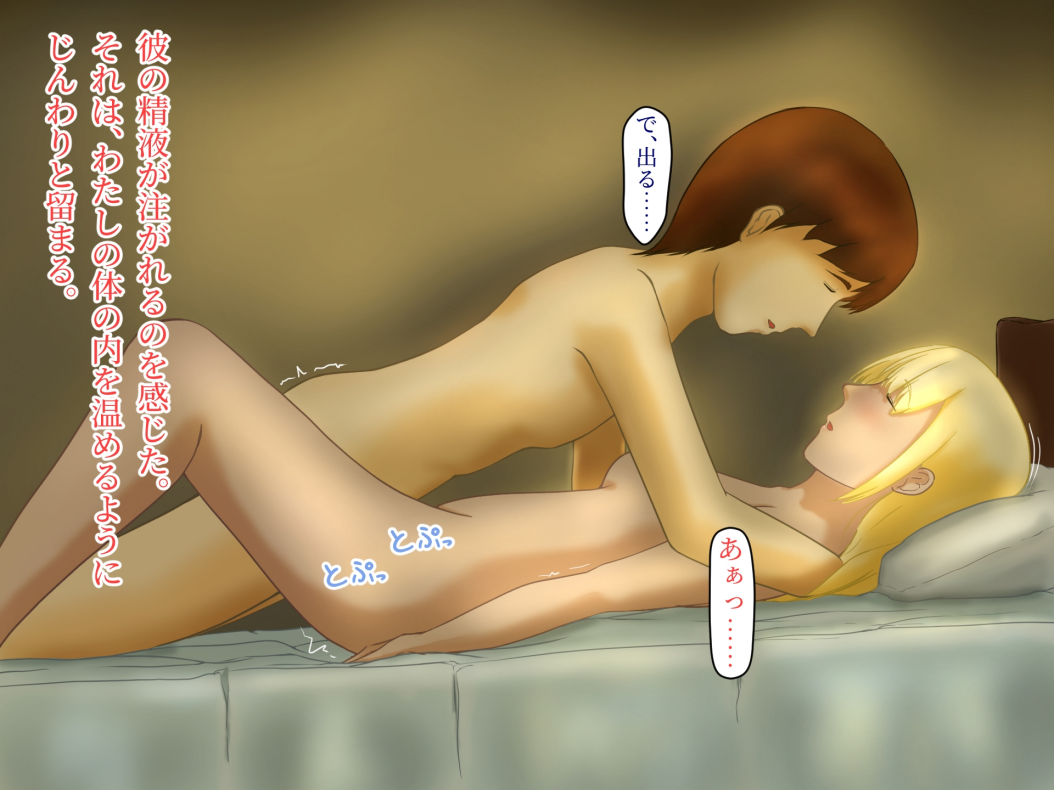

体の中で彼の動きを感じる度に、
わたしの心は躍り、彼への想いを強くする。
裸同士であっても抱き合っただけでは
得られない感覚に酔いしれた。
カルノっ、
カルノっ
ぴちゃ
ぴちゃ


思わず、それに苦笑する。
お酒なんてほとんど飲みはしないのに。
あっ……
そこ、いいの
ちゅぷ
ちゅぷ
でも、それが今のわたしを表すのに一番近い言葉。
わたしは、再び彼のものに意識を集中した。


彼の動きが早くなる。
んっ
はっ
あっ
んっ
ちゅぷ
ぴちゃ
体の中が擦られるたび、わたしの心の奥底が昂り、
自分ではないものに支配されるような怖さと、
それを待ち望む興奮に包まれる。

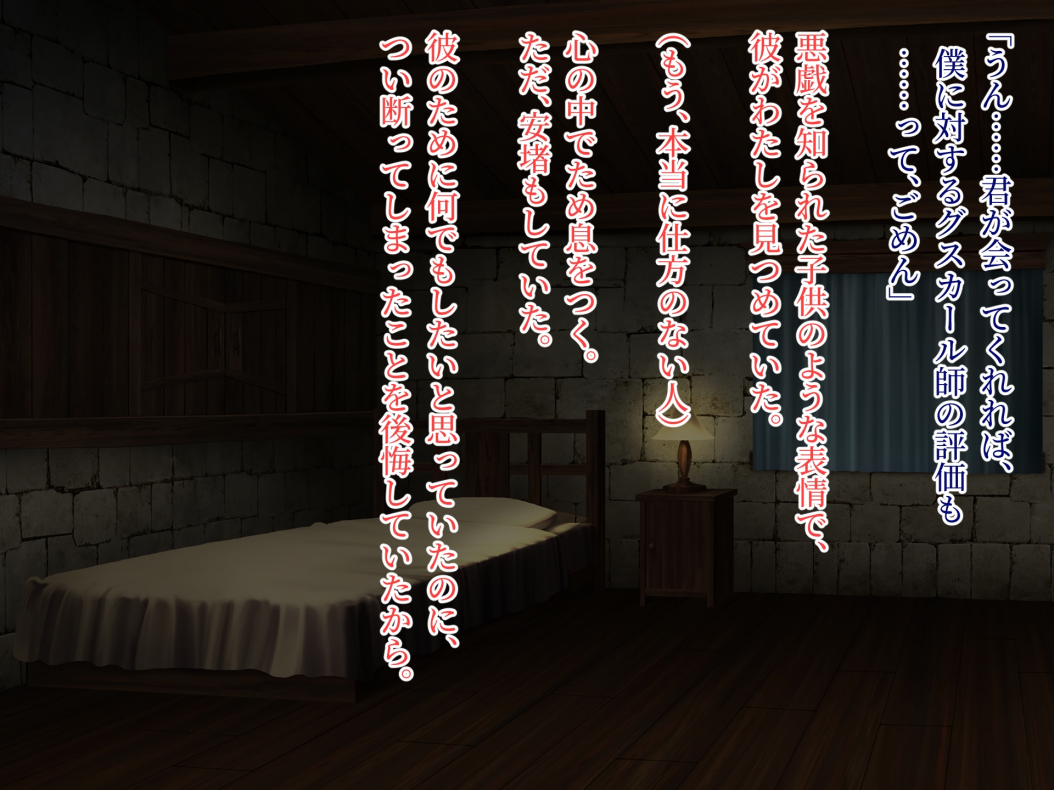


その声と共に、より動きが早くなる。
わたしは全身から力を抜くと、それに身を委ねた。


彼の精液が注がれるのを感じた。
それは、わたしの体の内を温めるように
じんわりと留まる。
で、出る……
あぁっ……
とぷっ
とぷっ

彼の体の温かさと、わたしの内の温かさ。
どちらも感じたくて、わたしは彼の体を抱きしめた。

「考えてくれた？」
一度目の行為が終わって落ち着いた彼が、
わたしの髪を優しく撫でつけてくれながら、
そう尋ねてくる。
「わたしのような者には畏れ多いわ」
あの話だろう事を察して、わたしは再び断った。
「グスカール師がすごく興味を
持たれているようでさ。
この前も催促されたんだ」
「断ってくれたのでしょう？」
「それが……」
「あなた、まさか？」


「うん……君が会ってくれれば、
僕に対するグスカール師の評価も
……って、ごめん」
悪戯を知られた子供のような表情で、
彼がわたしを見つめていた。
（もう、本当に仕方のない人）
心の中でため息をつく。
ただ、安堵もしていた。
彼のために何でもしたいと思っていたのに、
つい断ってしまったことを後悔していたから。

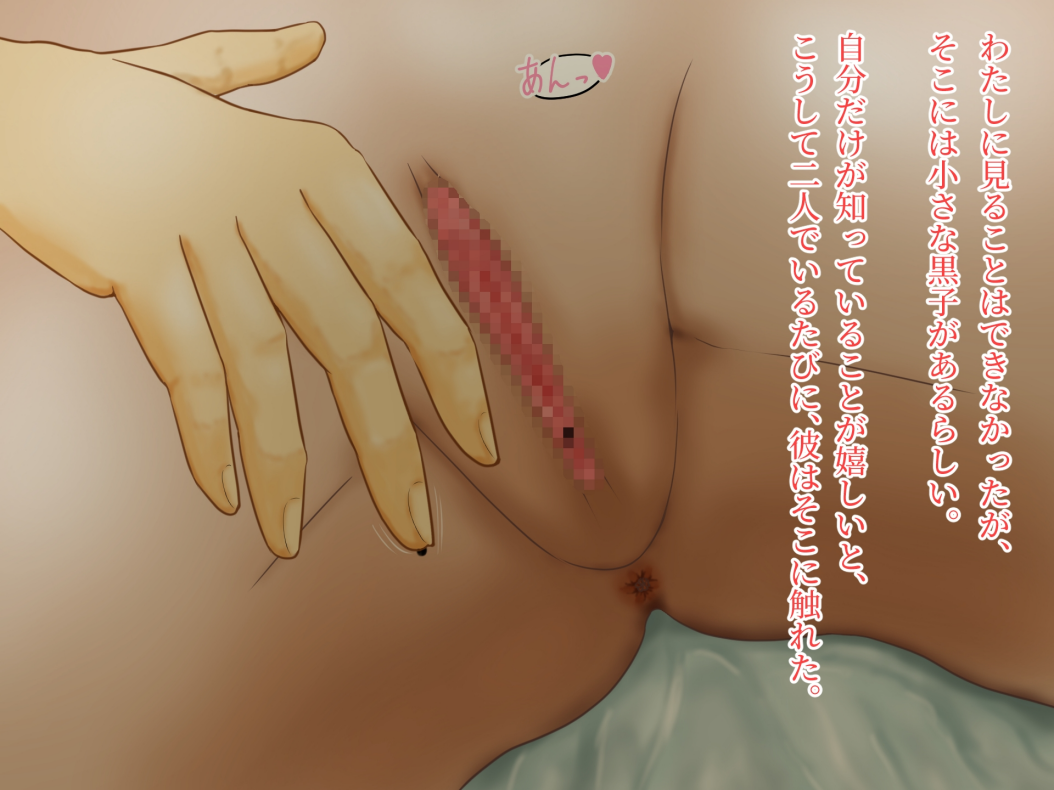
「……わかりました。一度だけですよ」
わたしはうなずいた。
「愛してるよ、セリシア」

「まったく、調子いいんですから」

「そんなことはないよ、
いつも君には感謝してる」
すっ

そう言って彼はいつもの場所、
わたしの右太ももの股に近い所を撫でる。
さわ…

「もうっ、すぐそこを触るー」
すりっ


あんっ♥
わたしに見ることはできなかったが、
そこには小さな黒子があるらしい。
自分だけが知っていることが嬉しいと、
こうして二人でいるたびに、彼はそこに触れた。

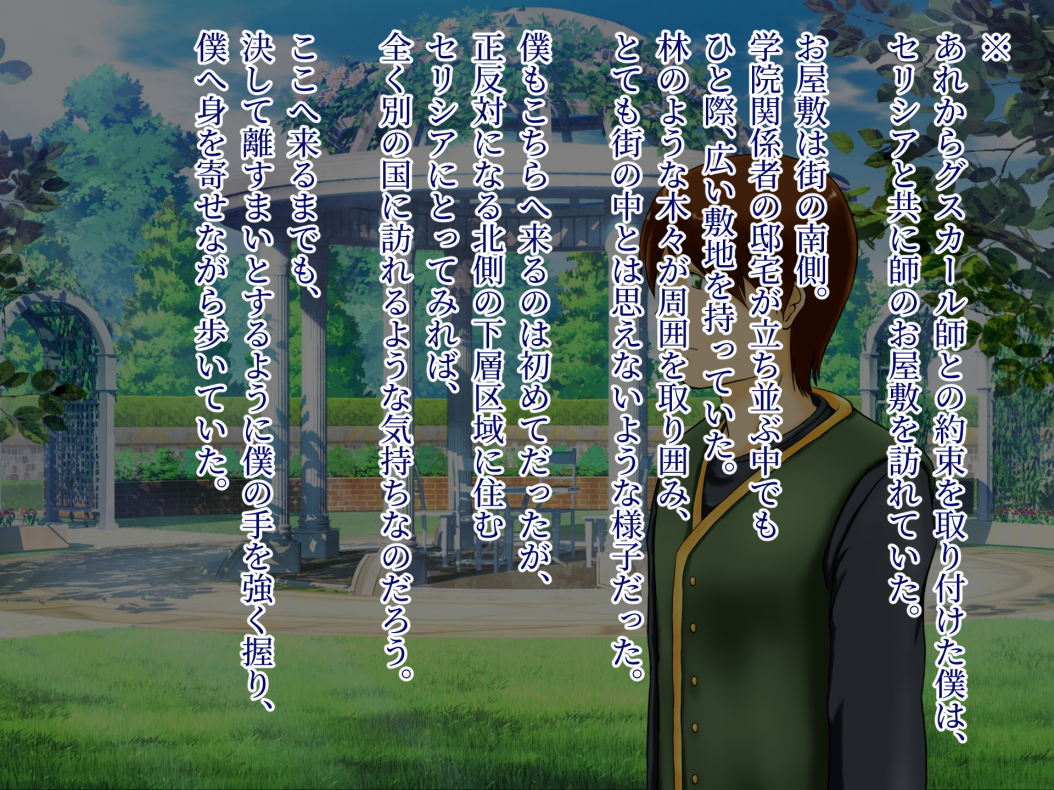
わたしも恥ずかしくてつい咎めてしまうけれど、
触れられるたび、彼に愛されていることが
感じられて嬉しかった。

「じゃあ、明日話をしてくるよ。
君はいつがいい？」
「わたしは、いつでも構いません」
「ありがとう」
そう言って、彼がわたしの唇をふさぐ。
わたしもそれに応えて、
再びわたしたちは体を重ねた。
いつものように彼が数度動き、
彼のものがわたしの内に注がれる。

もっと……と思ったとき、
彼の体がわたしにもたれかかる。
疲れて眠ってしまったようだった。

僅かな物足りなさを感じながら、
荒く息を吐く彼を抱きしめる。

彼の体の温もりを感じながら、
この時がずっと終わらないで欲しいと願った。



※
あれからグスカール師との約束を取り付けた僕は、
セリシアと共に師のお屋敷を訪れていた。
お屋敷は街の南側。
学院関係者の邸宅が立ち並ぶ中でも
ひと際、広い敷地を持っていた。
林のような木々が周囲を取り囲み、
とても街の中とは思えないような様子だった。
僕もこちらへ来るのは初めてだったが、
正反対になる北側の下層区域に住む
セリシアにとってみれば、
全く別の国に訪れるような気持ちなのだろう。
ここへ来るまでも、
決して離すまいとするように僕の手を強く握り、
僕へ身を寄せながら歩いていた。

その姿を見て、
僕のわがままに突き合わせてしまったこと、
自分の考えの至らなさを後悔した。
これが終わったら、彼女が幸せに暮らせるように、
彼女の望むことを何でもしよう。
そう改めて思い直すと、
目の前の扉のノッカーを叩いた。

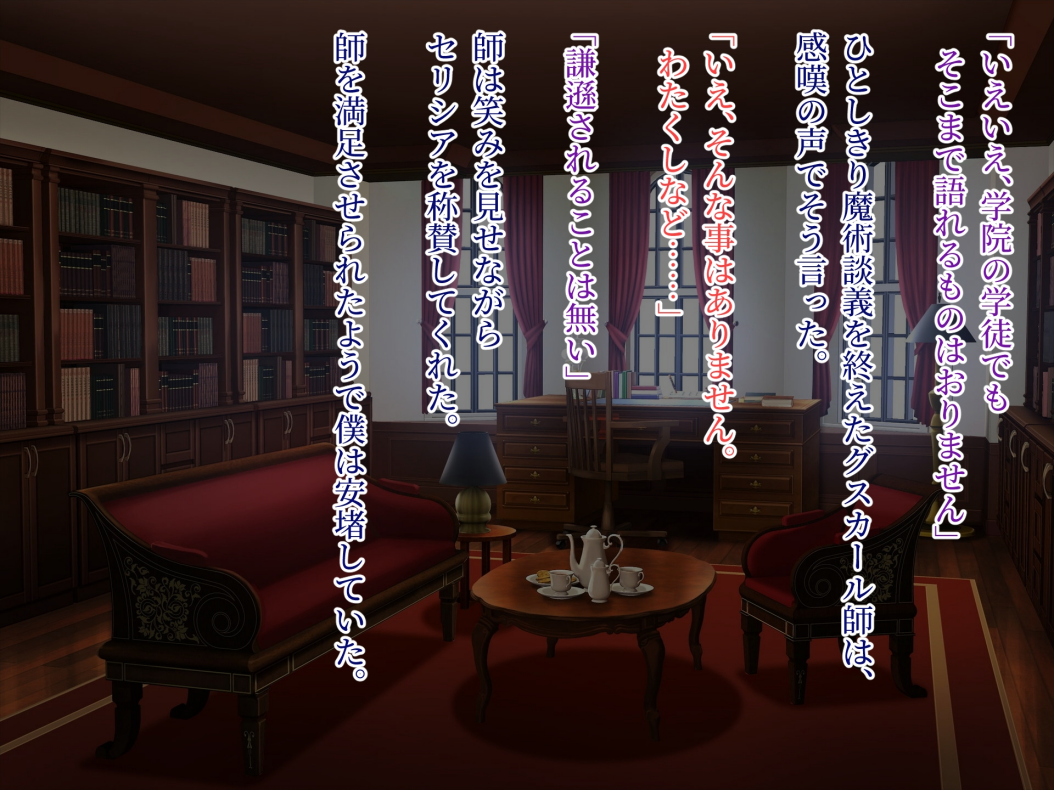
しばらくしてから扉が開かれた。
「お待ちしておりました」

召使なのだろう女性が、僕たちを迎え入れる。
導かれるまま、おそるおそる扉を潜った僕らは、
見たことの無い景色に圧倒された。
広間の高い天井から差し込む陽の光で
宝石のように輝いているように見えた。

「こちらへどうぞ」
召使に促され二階へ昇る。
すぐ手前の部屋に通された。
立派な装飾の椅子が置かれたその部屋は、
来客のための応接室なのだろう。
「旦那様がいらっしゃいますので、
お掛けになってお待ちください」
僕たち二人は落ち着かないままに長椅子に座り、
緊張の面持ちで屋敷の主を待ち受けた。

しばらくして扉がノックされ、開かれる。
僕たちは立ち上がり、グスカール師を迎えた。
「よく参られた。お二人とも座られよ」
目の前に座る師に促されて、
僕たちも腰を下ろす。
そして、応接室での歓談が始まった。
話題も魔術に関してが中心で
良く知ることでもあったからか、
セリシアの緊張もいつの間にかほぐれ、
普段のように話せているようだった。

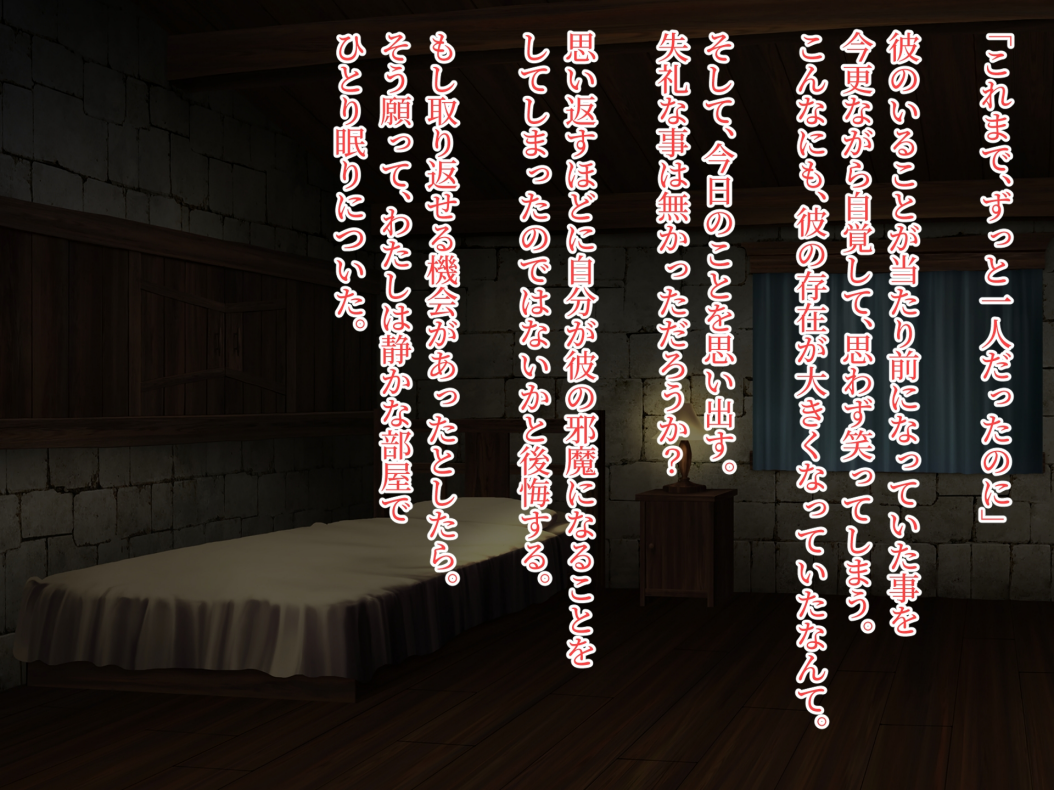
「要素融合論の祖は、カシーリの第五理論と言われておるが」
「カシーリの理論は端緒は正しいですが、その構築が誤っていると思われます。なぜなら……」
言葉に淀みが無くなり始めた姿を見て、彼女に熱が入ってきたことを気づく。
「なるほど、実に参考になる」
「いえ、父の研究の受け売りみたいなものです……賢者様の前で申し訳ございません」
我に返ったセリシアが恥ずかしそうに顔を俯かせ、体を縮こませて謝る。

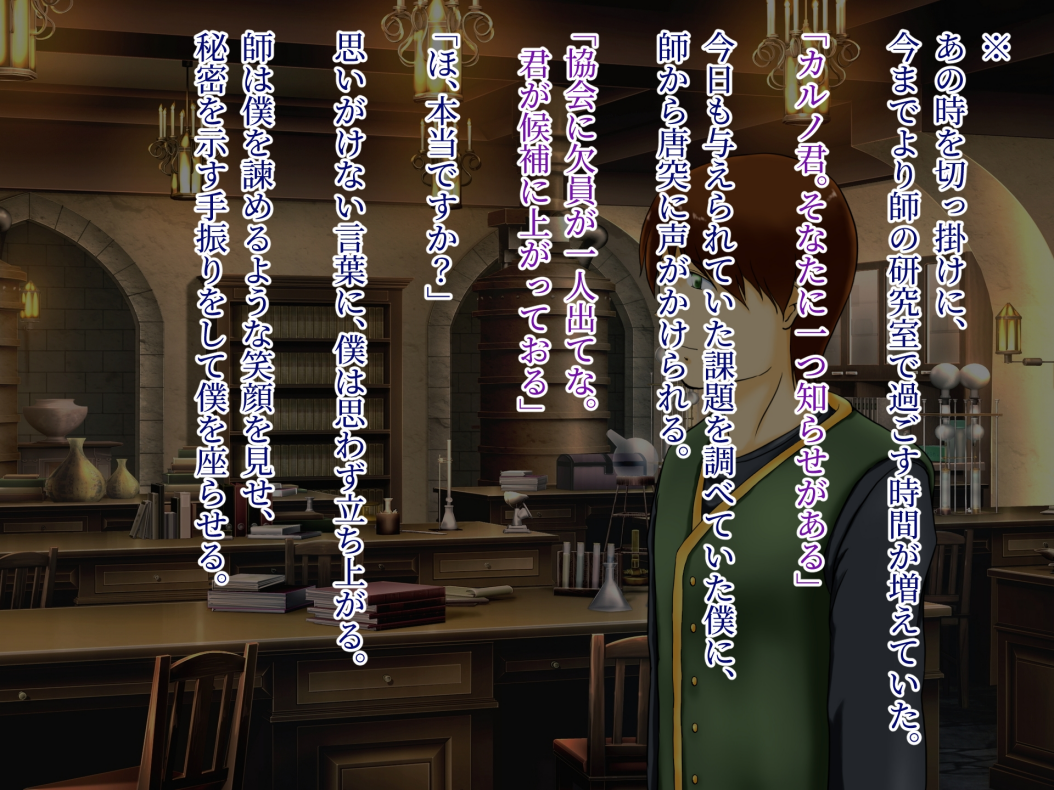

「いえいえ、学院の学徒でもそこまで語れるものはおりません」
ひとしきり魔術談義を終えたグスカール師は、感嘆の声でそう言った。
「いえ、そんな事はありません。わたくしなど……」
「謙遜されることは無い」
師は笑みを見せながらセリシアを称賛してくれた。
師を満足させられたようで僕は安堵していた。

丁度いい所で扉がノックされた。
「失礼いたします、旦那様。
そろそろお時間になります」
先ほどの女性召使が、この時の終了を告げる。
「おお、もうそんな時間か」
名残惜し気な師の声。

「貴女とお話しできて、とても楽しかった。
そして、カルノ君は将来学院に必要となる
有望な若者です。
貴女の智で良く支えていただきたい」
別れ際に師がそう告げて彼女の手を取る。
「はい、ありがとうございます」
セリシアも深々と頭を下げた。
「そしてカルノ君。このような聡明なお嬢さんに
出会える機会はそうはあるまい。大事になさい」
僕を向いて同じように手を取っていただく。
師の言葉に、セリシアが大事な存在であることを
改めて思い知らされた。

※
ふうっ、と大きなため息が出る。
グスカール様のお屋敷から戻って、
ようやく一息ついた所だった。
カルノは明日早くから用事があるからと、
今日は自分の家に戻っていた。
久しぶりに一人で過ごす時間だったが、
わたし以外に人のいない部屋はどうにも
落ち着かない。


「これまで、ずっと一人だったのに」
彼のいることが当たり前になっていた事を
今更ながら自覚して、思わず笑ってしまう。
こんなにも、彼の存在が大きくなっていたなんて。
そして、今日のことを思い出す。
失礼な事は無かっただろうか？
思い返すほどに自分が彼の邪魔になることを
してしまったのではないかと後悔する。
もし取り返せる機会があったとしたら。
そう願って、わたしは静かな部屋で
ひとり眠りについた。


※
あの時を切っ掛けに、
今までより師の研究室で過ごす時間が増えていた。
「カルノ君。そなたに一つ知らせがある」
今日も与えられていた課題を調べていた僕に、
師から唐突に声がかけられる。
「協会に欠員が一人出てな。
君が候補に上がっておる」
「ほ、本当ですか？」
思いがけない言葉に、僕は思わず立ち上がる。
師は僕を諫めるような笑顔を見せ、
秘密を示す手振りをして僕を座らせる。

当たり前だ。
僕は落ち着きを取り戻すと、
改めて師に向いた。
師が小声で続ける。
「少し揉めておるようじゃが、
わしも推薦しておるし問題なかろう」
「ありがとうございます」
「なに、そなたの実力じゃ。己を誇るが良い」
「はい！」

「そう言えば、あのお嬢さんはご健勝かな？」
「セリシアですか？　はい、特に何事もなく」
「ああ、そうだ。なかなか見所のあるお嬢さんだ、市井に埋もれているのはもったいない」
「ありがとうございます。そう言っていただけると彼女も喜ぶと思います」
「そこでな、わしが後見として支援をしたいと考えておるが、どうかな？」
「支援ですか？」

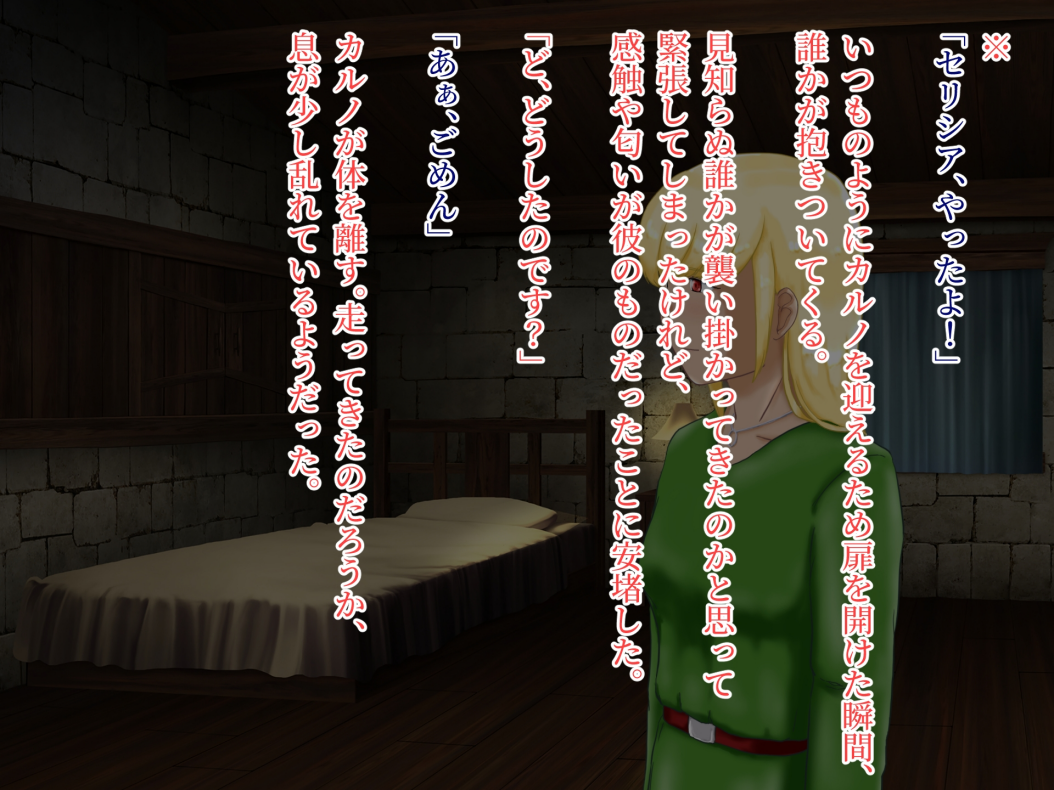
「来期には間もあるのですぐにとはいかぬが、しばしの間わしの元でこちらの生活に慣れた後、学院へ入る手続きを進めたいと考えておる。どうであろう？」

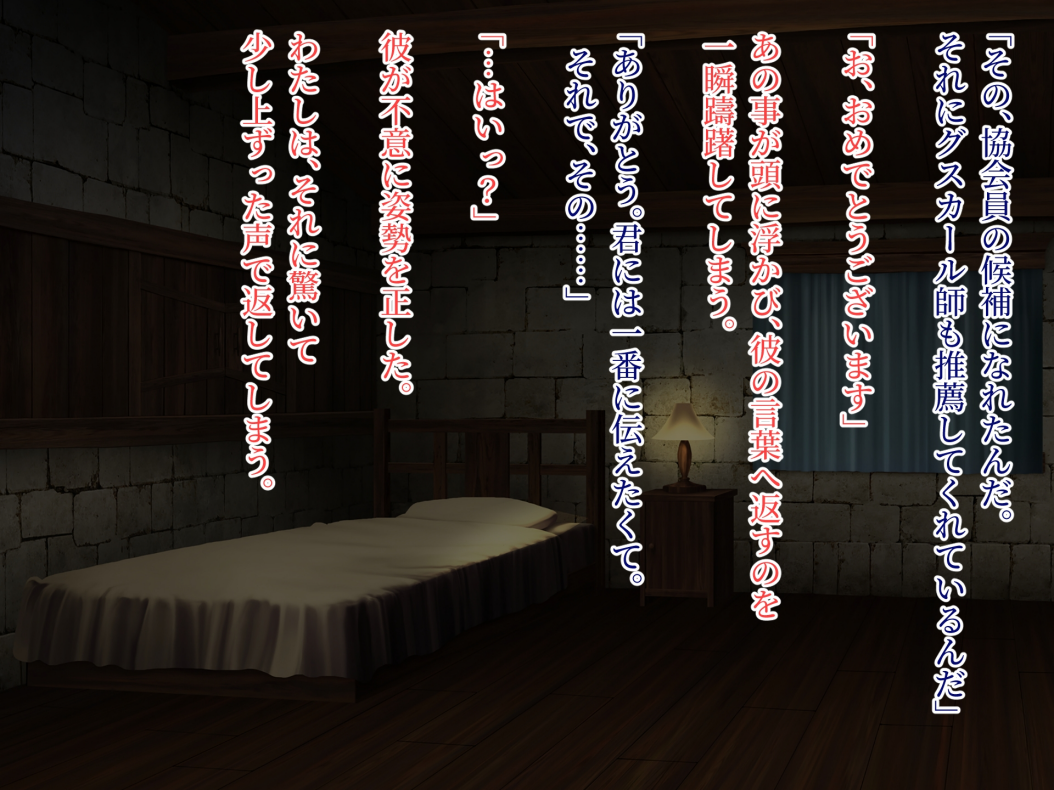
「お心遣い痛み入ります。私の方でご返事できることではありませんが、彼女に確認します」

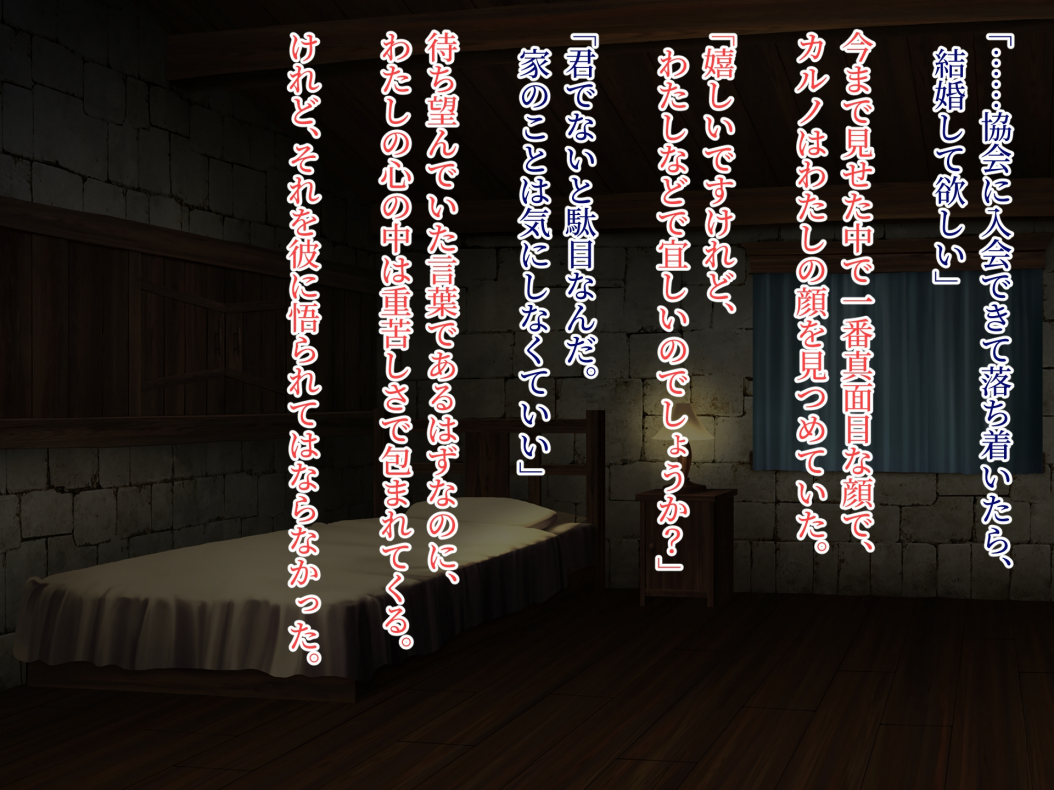
「うむ、あくまで本人の希望が大事じゃからな」

思いがけない提案は、協会の話を忘れさせてしまう程のものだった。

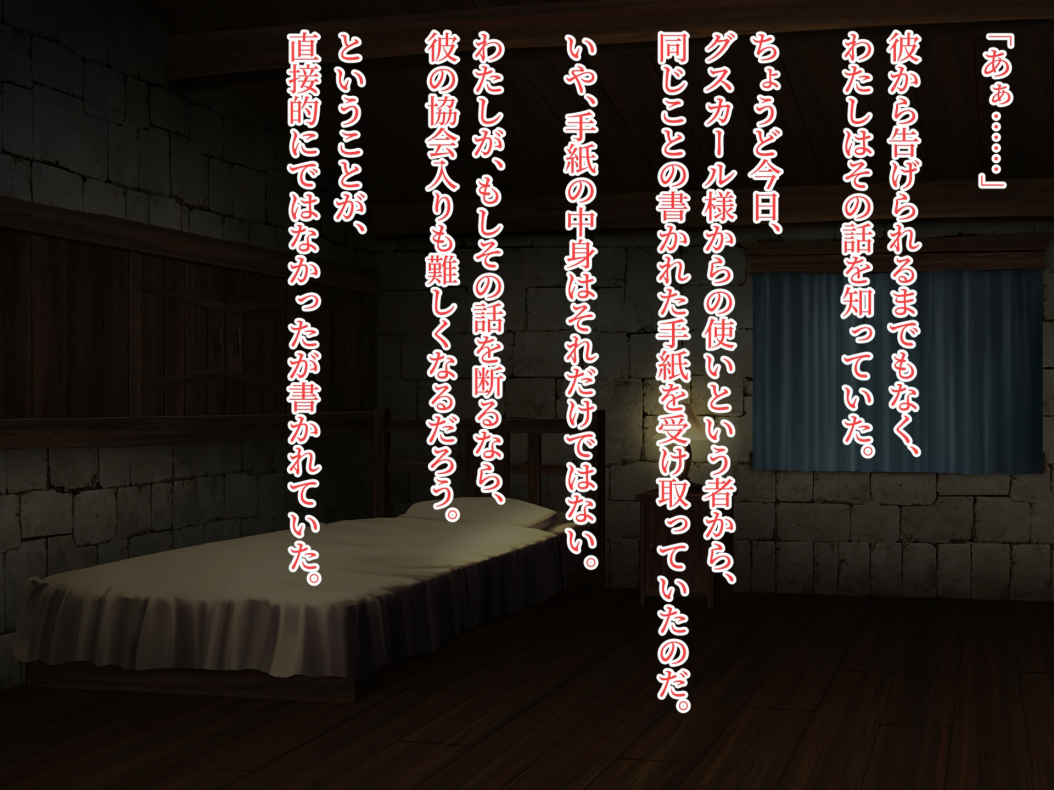
僕は彼女との将来を夢想し、一刻も早く、これをセリシアに伝えようと彼女の家に向かった。


※
「セリシア、やったよ！」
いつものようにカルノを迎えるため扉を開けた瞬間、
誰かが抱きついてくる。
見知らぬ誰かが襲い掛かってきたのかと思って
緊張してしまったけれど、
感触や匂いが彼のものだったことに安堵した。
「ど、どうしたのです？」
「あぁ、ごめん」
カルノが体を離す。走ってきたのだろうか、
息が少し乱れているようだった。


「その、協会員の候補になれたんだ。
それにグスカール師も推薦してくれているんだ」
「お、おめでとうございます」
あの事が頭に浮かび、彼の言葉へ返すのを
一瞬躊躇してしまう。
「ありがとう。君には一番に伝えたくて。
それで、その……」
「…はいっ？」
彼が不意に姿勢を正した。
わたしは、それに驚いて
少し上ずった声で返してしまう。


「……協会に入会できて落ち着いたら、
結婚して欲しい」
今まで見せた中で一番真面目な顔で、
カルノはわたしの顔を見つめていた。
「嬉しいですけれど、
わたしなどで宜しいのでしょうか？」
「君でないと駄目なんだ。
家のことは気にしなくていい」
待ち望んでいた言葉であるはずなのに、
わたしの心の中は重苦しさで包まれてくる。
けれど、それを彼に悟られてはならなかった。

「貴方の御心のままに。お受け致します」
ごまかす余裕も無く、本心を伝える。
「ありがとう」
再び、彼がわたしを抱きしめる。
わたしも、心の重さから逃れるように
彼に体を預けた。
「あぁ、そうだ。
グスカール師から君を支援したい
というお話をいただいているんだ」
「支援、ですか？」
「君の能力を大変褒められていてね、
学院へ入学しないかと」


「あぁ……」
彼から告げられるまでもなく、
わたしはその話を知っていた。
ちょうど今日、
グスカール様からの使いという者から、
同じことの書かれた手紙を受け取っていたのだ。
いや、手紙の中身はそれだけではない。
わたしが、もしその話を断るなら、
彼の協会入りも難しくなるだろう。
ということが、
直接的にではなかったが書かれていた。

彼の才能は、わたしも分かっている。
協会に入ることができれば、
父の叶わなかったことも
成し遂げられるに違いない。

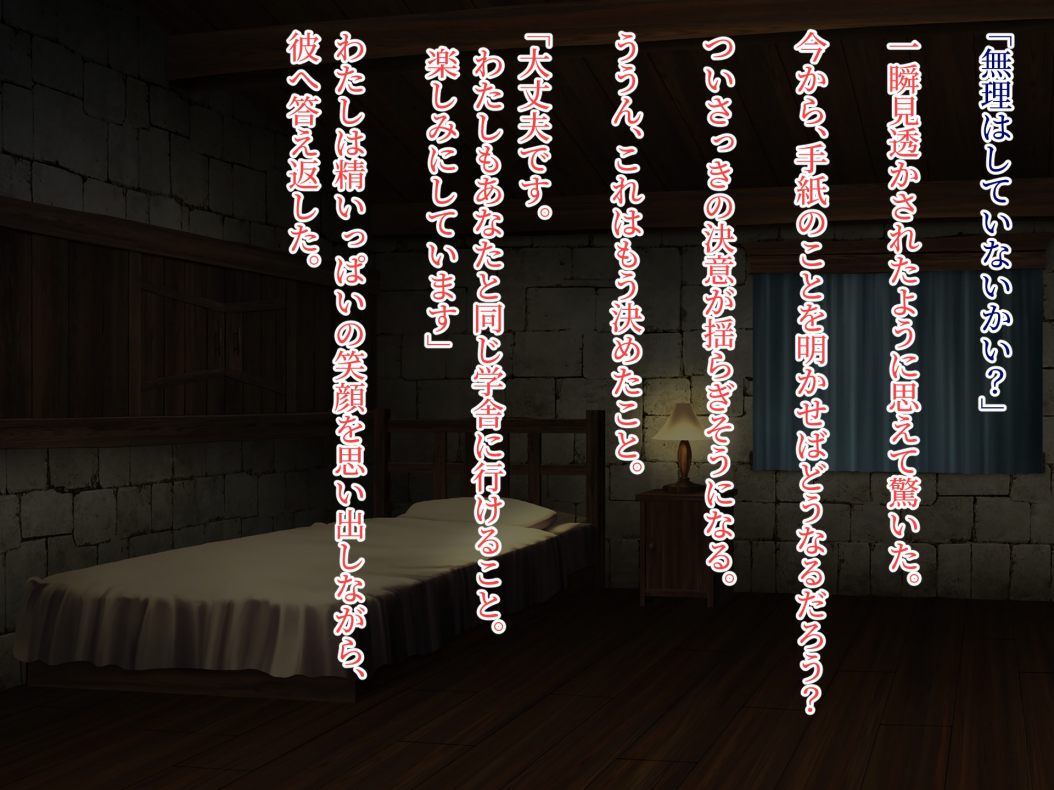
「将来、君と一緒に研究をしていけたらと
思ったりしたんだけど……ごめん」

「そうですね。そうなれたら素敵です」

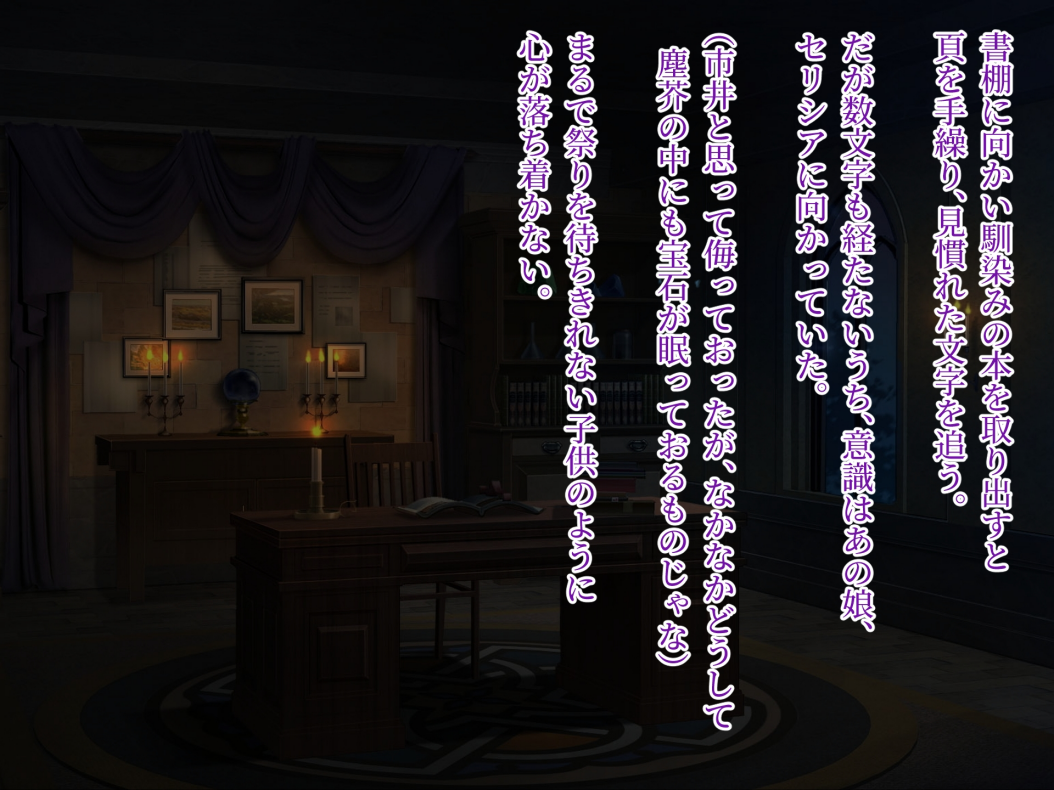
わたしの言葉に屈託なく笑うカルノ。
そして、その顔を見てわたしは決意した。

何も殺される訳ではない。
わたしが耐えればいいだけのことだ。

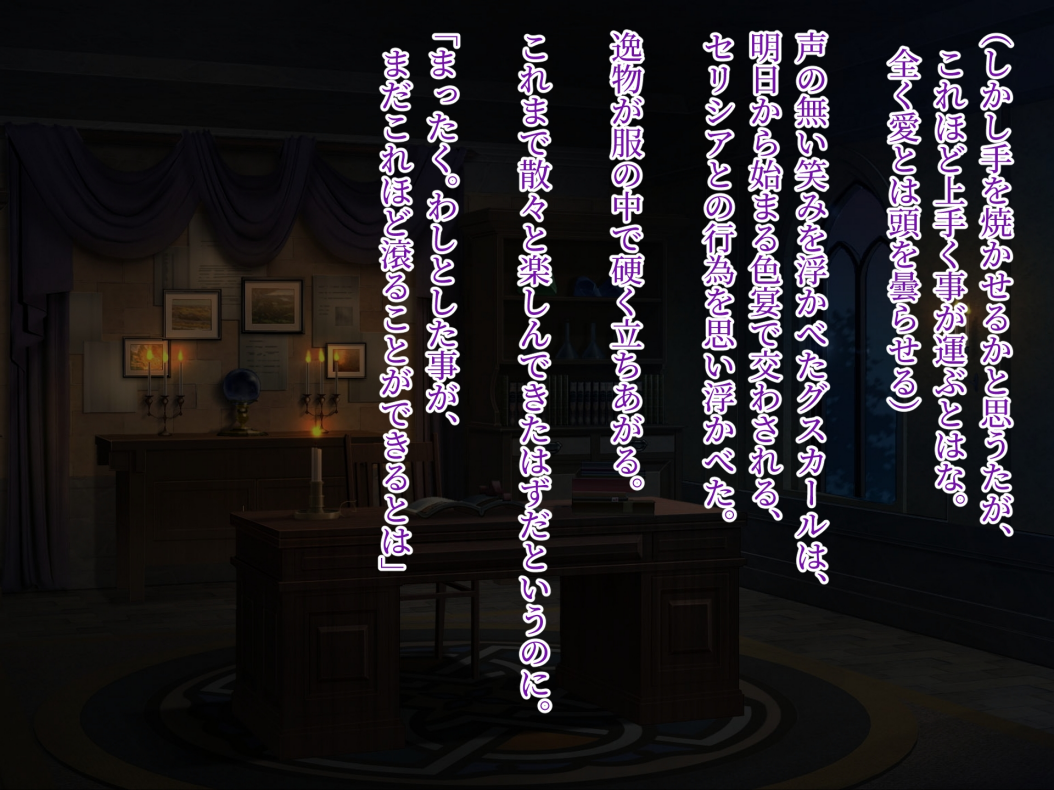
「グスカール様に、お話をお受けしたいと
お伝えいただけますか」


「無理はしていないかい？」
一瞬見透かされたように思えて驚いた。
今から、手紙のことを明かせばどうなるだろう？
ついさっきの決意が揺らぎそうになる。
ううん、これはもう決めたこと。
「大丈夫です。
わたしもあなたと同じ学舎に行けること。
楽しみにしています」
わたしは精いっぱいの笑顔を思い出しながら、
彼へ答え返した。

※
「ふむ、明日か……」



書棚に向かい馴染みの本を取り出すと
頁を手繰り、見慣れた文字を追う。
だが数文字も経たないうち、意識はあの娘、
セリシアに向かっていた。
（市井と思って侮っておったが、なかなかどうして
塵芥の中にも宝石が眠っておるものじゃな）
まるで祭りを待ちきれない子供のように
心が落ち着かない。


（しかし手を焼かせるかと思うたが、
これほど上手く事が運ぶとはな。
全く愛とは頭を曇らせる）
声の無い笑みを浮かべたグスカールは、
明日から始まる色宴で交わされる、
セリシアとの行為を思い浮かべた。
逸物が服の中で硬く立ちあがる。
これまで散々と楽しんできたはずだというのに。
「まったく。わしとした事が、
まだこれほど滾ることができるとは」

扉が不意に叩かれた。
「何か？」
先ほどまでの想像を消し、短く答える。
扉が静かに開かれる。
そこには召使のラスファが立っていた。
「旦那様、客人のお部屋の用意が整いました」
「そうか、ご苦労じゃったな」
「それでは……」
「あぁ……いや。こちらに来なさい」

締めかけた扉を再び開き、ラスファが書斎に入る。
グスカールの前に近づくと無言のまま跪いた。
失礼致します
手慣れた仕草で下衣を落とし、
硬く、そそり立った逸物を取り出す。
さわっ

しゅっ
しゅっ

いかがでしょうか？
しゅっ
しゅっ

ちろ。と舌を出して、既に濡れた鈴口を舐める。
もう、宜しいようですね
ちゅぷ…

「お主はできた召使であるよ」
グスカールの手がラスファの髪に触れ、
子を慈しむように撫でつける。
ちゅぷ
ちゅぱ

ラスファは、
顔にうっすらと笑みを浮かべると、
自らの唾液で更に濡れ、
灯りの照り返しで光るそれを
ゆっくりと口の中に収めた。
ちゅぷ…

じゅぷ
ちゅぱ

ラスファの顔がより激しく動き、
グスカールのモノを舐めしゃぶる。
じゅぷ
ちゅぱ
じゅぷ
ちゅぱ

う、む……
じゅぶっ
じゅぶっ
じゅぶっ
じゅぶっ

じゅぶっ
じゅぶっ
じゅぶっ
じゅぶっ

グスカールの呻きが微かに漏れた瞬間、
白いものがラスファの口の中を満たす。
むっ！
ドクッ！
ドクッ！

ラスファは丁寧に逸物から口を離す。
鈴口から艶やかに濡れた唇へ透明な糸が、
つぅ、と伸びた。
つぅー。

口の中に残るグスカールの白濁を
しばし味わうかのように留めた後、
ゆっくりとそれを飲み込んだ。
じゅる…
ゴクッ

ラスファは、口の端に残る精液を舐めとる。
「まだ、こんなに……
ご満足いただけず、申し訳ございません」
謝罪の言葉を紡ぎながら、
そこには次の行為を期待する色を含んでいた。

ラスファは立ち上がり、書斎机に両腕を乗せた。
いつの間にかスカートは脱ぎ棄てられ、
露わになった尻をグスカールへ突き出す。
ヒヤ
ヒヤ

「続きは、私の中でお願い致します」
微笑みを見せながら、
誘うように腰を動かすラスファへ、
グスカールは近づいた。
ぶるる
ぶるる

既に露が溢れ、太ももまで滴るほど濡れた股に、
灯火の揺らめきが艶やかに照り返されていた。
ヒヤ
ヒヤ

グスカールはその煌きを確かめるように、
指でその根源をひと撫でした後、
躊躇なく自分の逸物を挿し込んだ。
あっ♥
ズブッ!

自分の快楽を消化するためだけと言わんばかりに
腰を激しく動かす。
んっ♥
ああっ♥
ジュブッ
ジュブッ

だが、ラスファの口からは苦しさなど
微塵も感じさせない快楽の喘ぎのみが漏れ響く。
あっ、あっ♥
いっ、いいですっ♥
ジュブッ
ジュブッ

もっと……奥まで、
くださいませ……
やっ、あっ♥
ジュブッ
ジュブッ

んっ、はっ！
あっ、あっ♥
ジュブッ
ジュブッ

わたくし、もう……
旦那様の子種を、
注ぎ込んでください♥
ジュブッ
ジュブッ

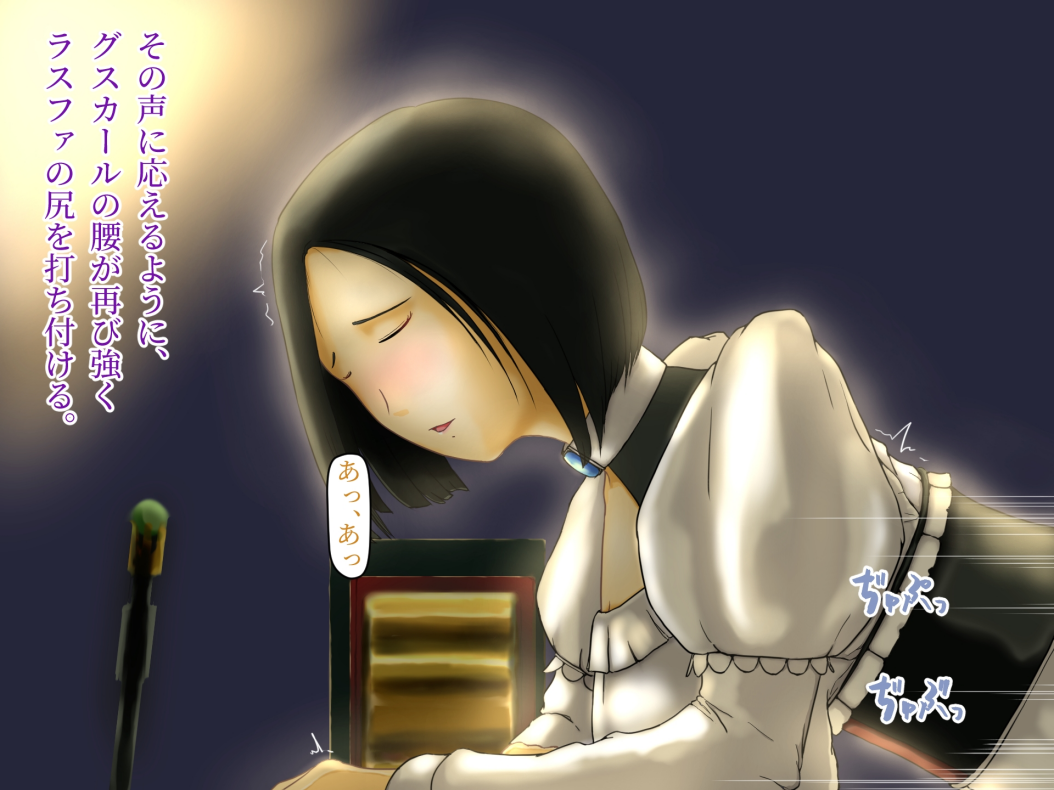
そのラスファの言葉に応えるように、
グスカールの腰の動きが急に早まる。
あっ♥
あっ♥
あっ♥
あっ、はっ
んっ……やはぁ♥
ジュブッ
ジュブッ
ジュブッ
ジュブッ

頂を登りきったかのような、
荒い息が吐き出された瞬間。
あっ！
ドプッ！
ドプッ！

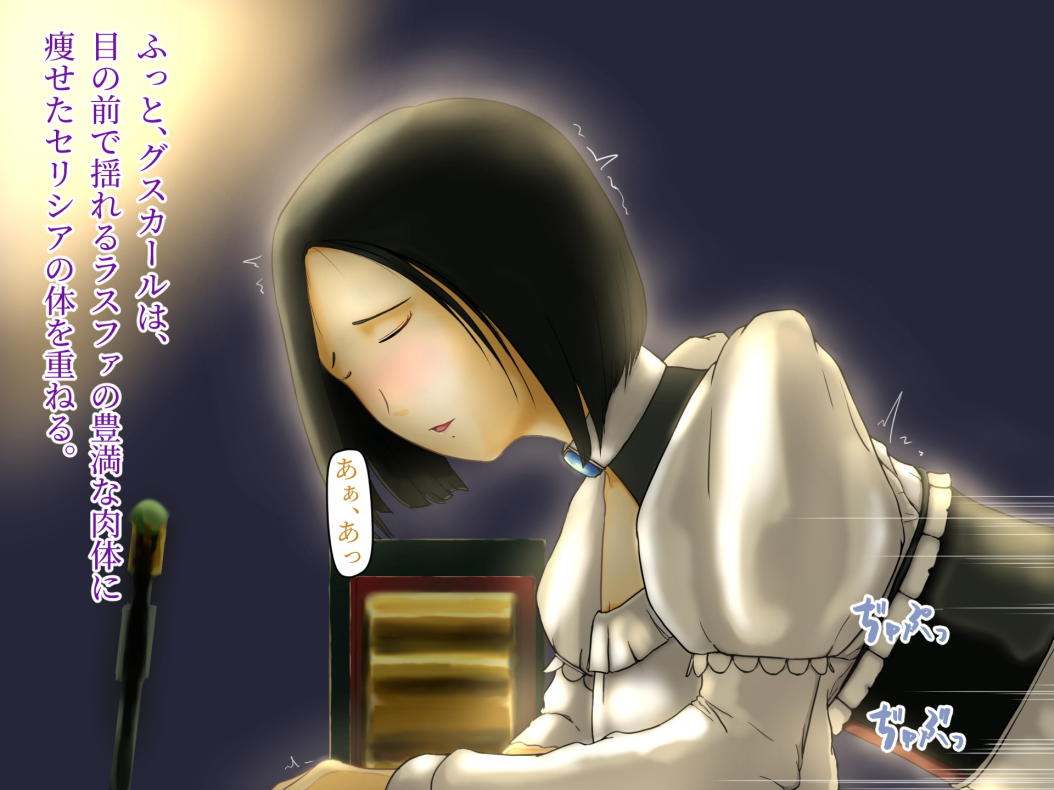
ラスファの中が白いもので満たされる。
ああ～～♥
ビュルッ!
ビュルッ!

「ふぅ」
と一息ついた直後、
グスカールのモノが再び屹立する。
あっ

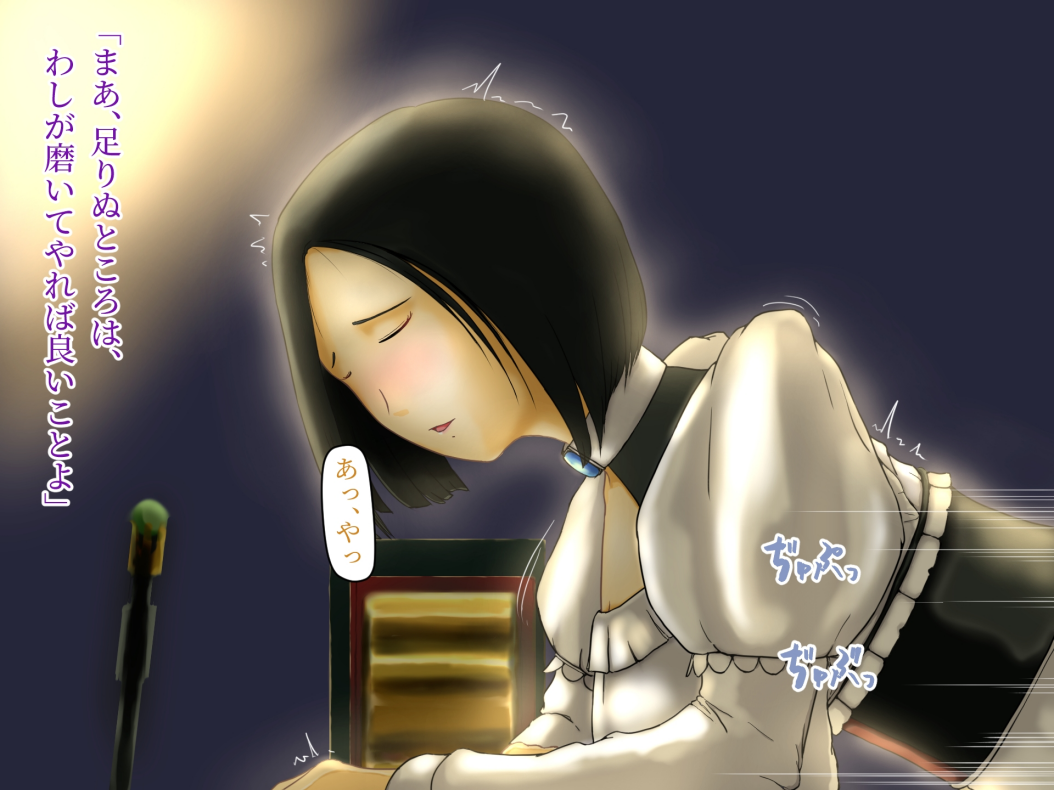
「旦那様のお気のすむままに」


その声に応えるように、
グスカールの腰が再び強く
ラスファの尻を打ち付ける。
あっ、あっ
ずぷっ
ずぷっ

ふっと、グスカールは、
目の前で揺れるラスファの豊満な肉体に
痩せたセリシアの体を重ねる。

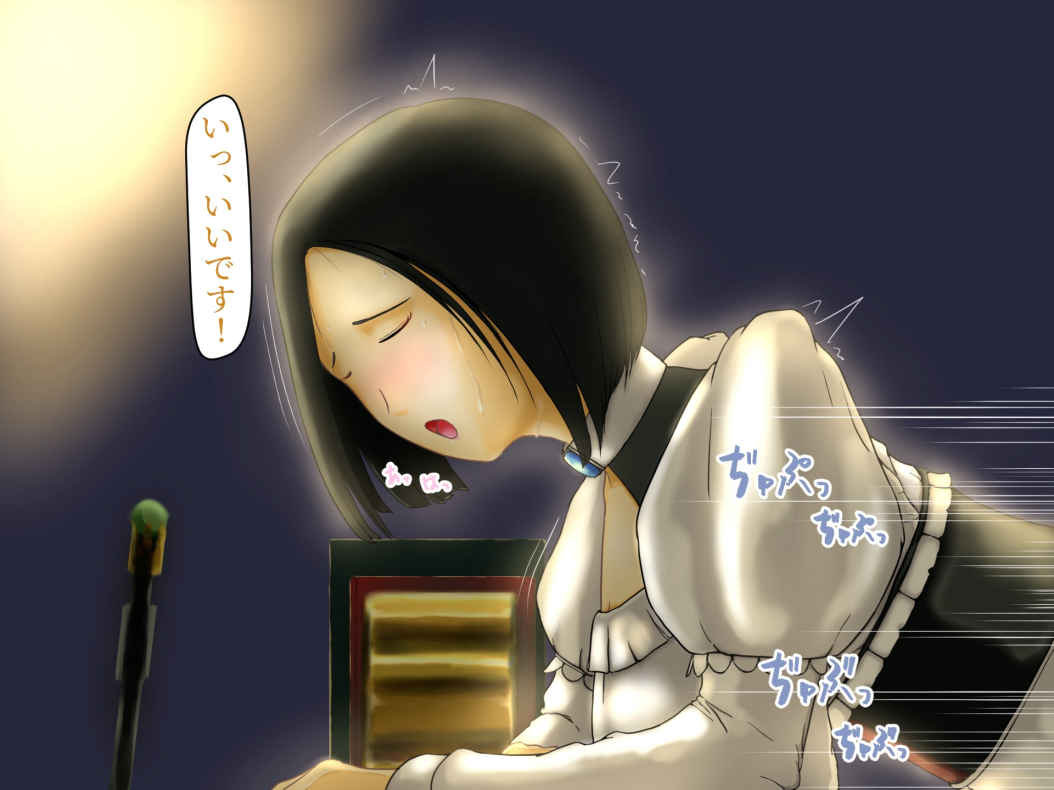


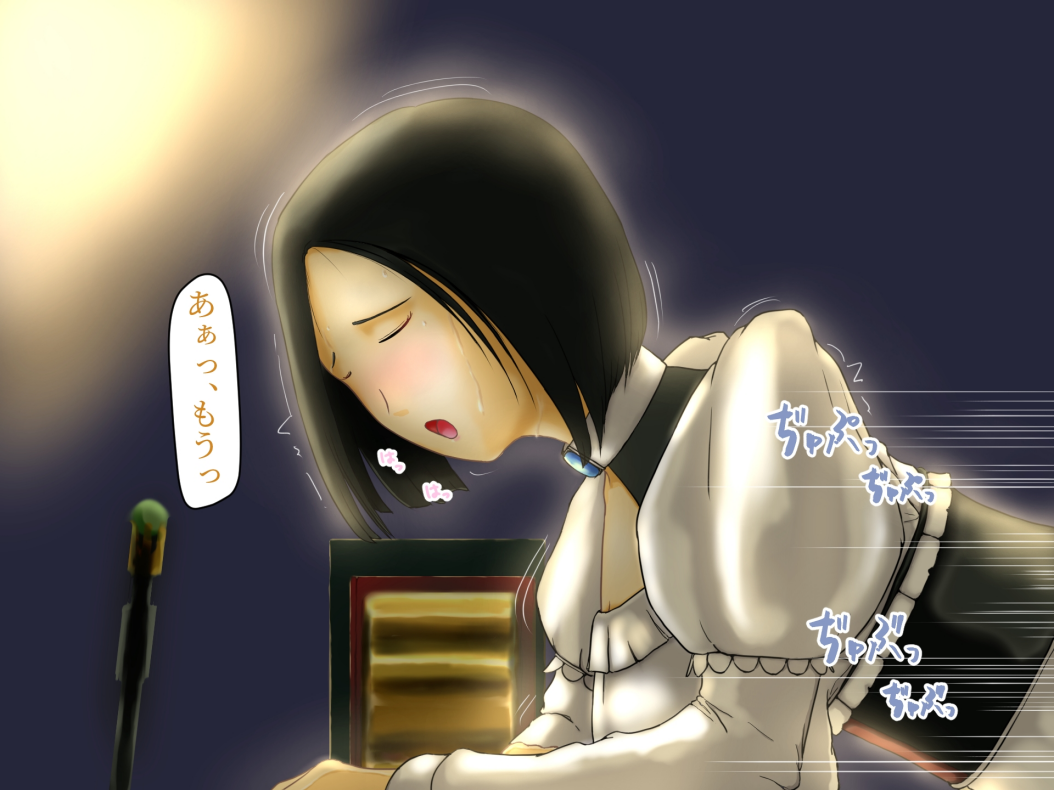
「見目は良いが、胸も尻も薄いのが難点かの」
はっ、あっ
ずぷっ
ずぷっ

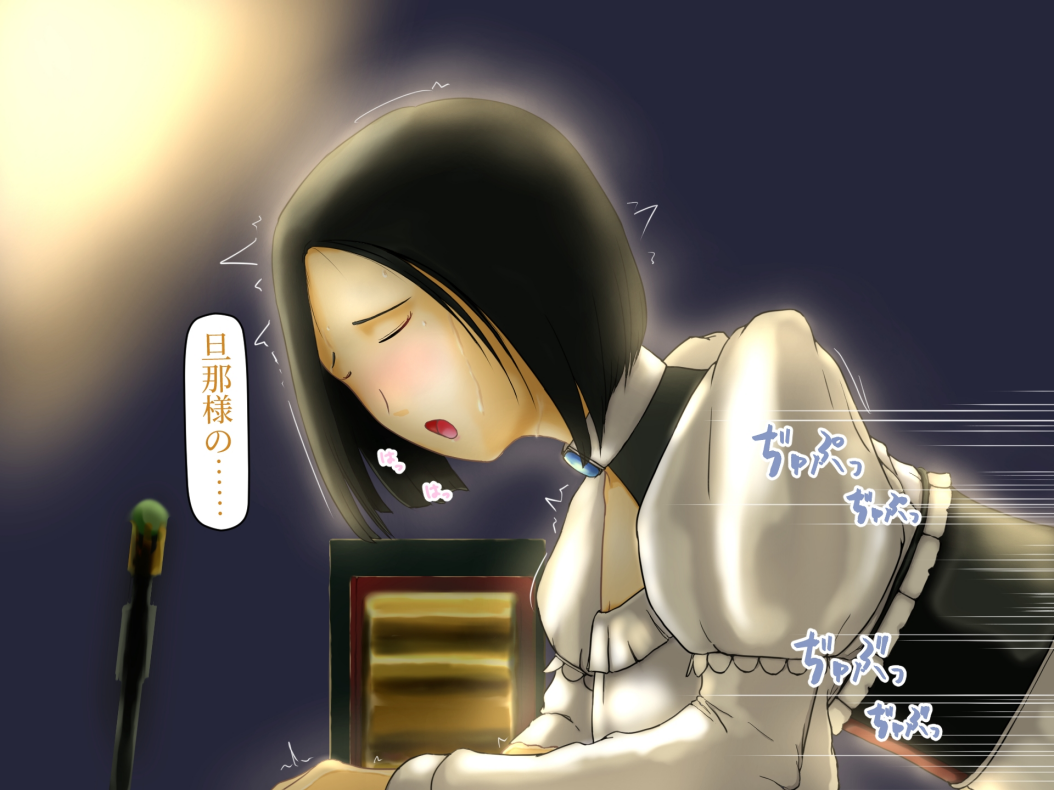

「まあ、足りぬところは、
わしが磨いてやれば良いことよ」
あっ、やっ
ぢゃぷっ
ぢゃぷっ

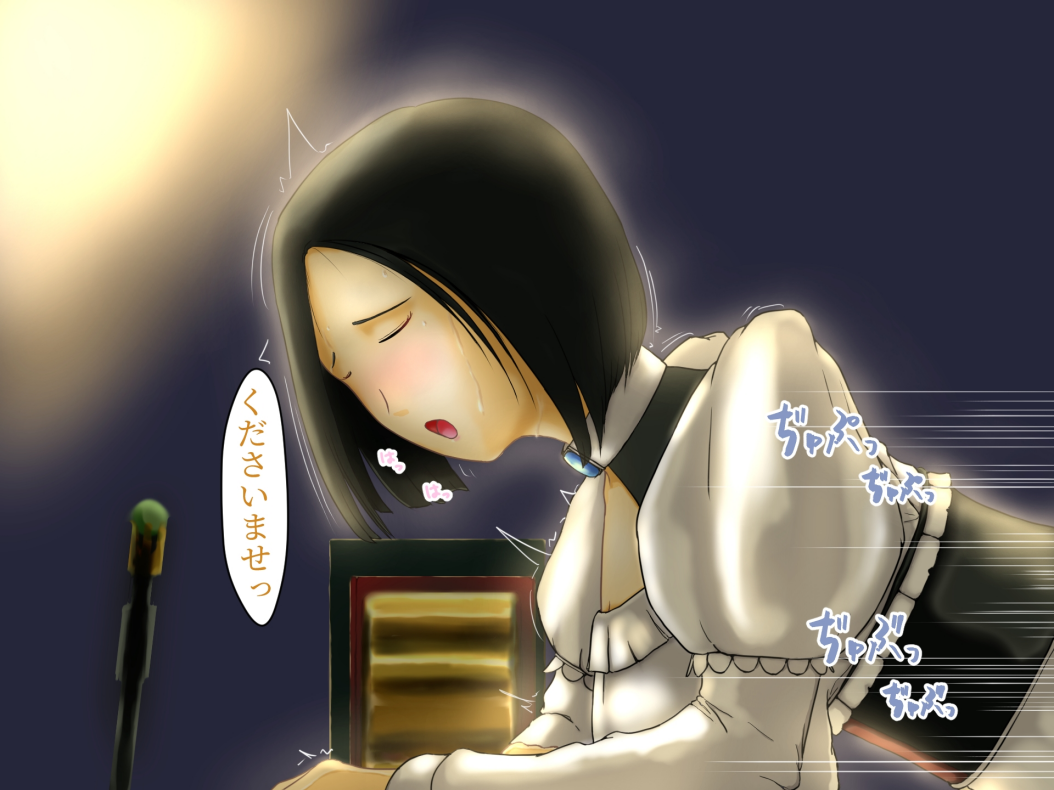
「なに、楽しみは多い方が良い」
いっ、あっ
ぢゃぷっ
ぢゃぷっ

グスカールの動きが更に勢いを増す。
ラスファの声もそれに合わせて高まる。
あんっ、あっ
ぢゃぷっ
ぢゃぷっ
ぢゃぷっ
ぢゃぷっ

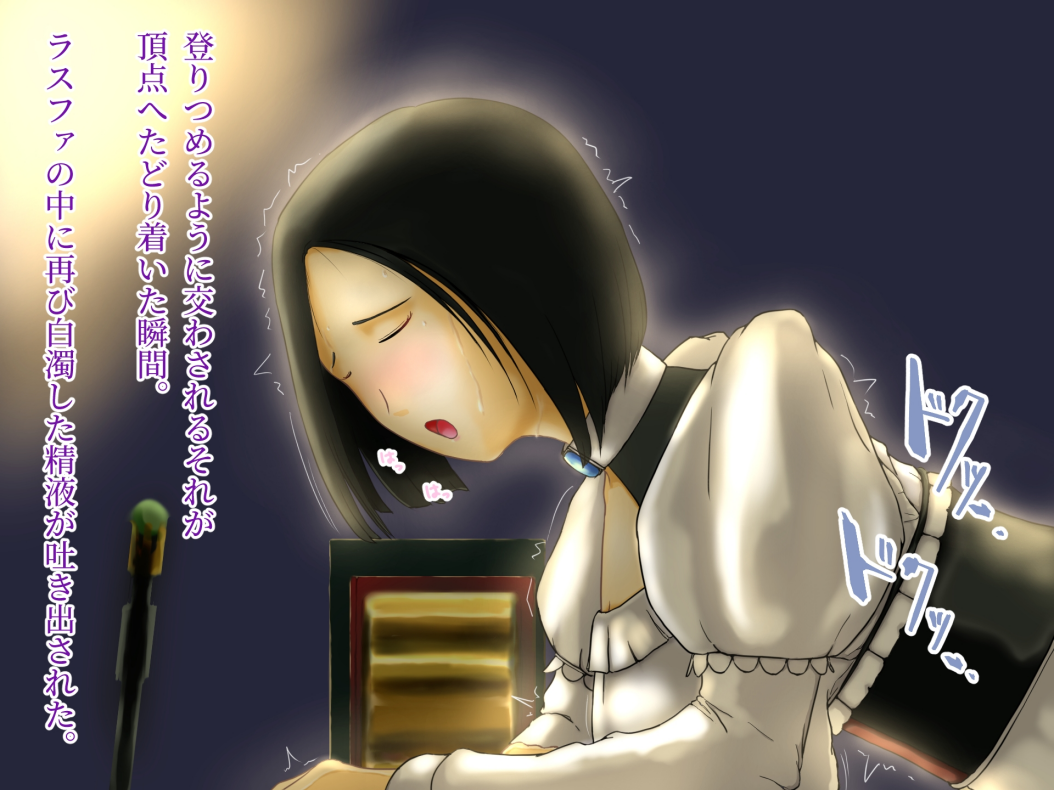

いっ、いいです！
ぢゅぷっ
ぢゅぷっ
ぢゅぷっ
ぢゅぷっ


あぁっ、もうっ
はっ、はっ
ぢゃぷっ
ぢゃぷっ
ぢゃぷっ
ぢゃぷっ

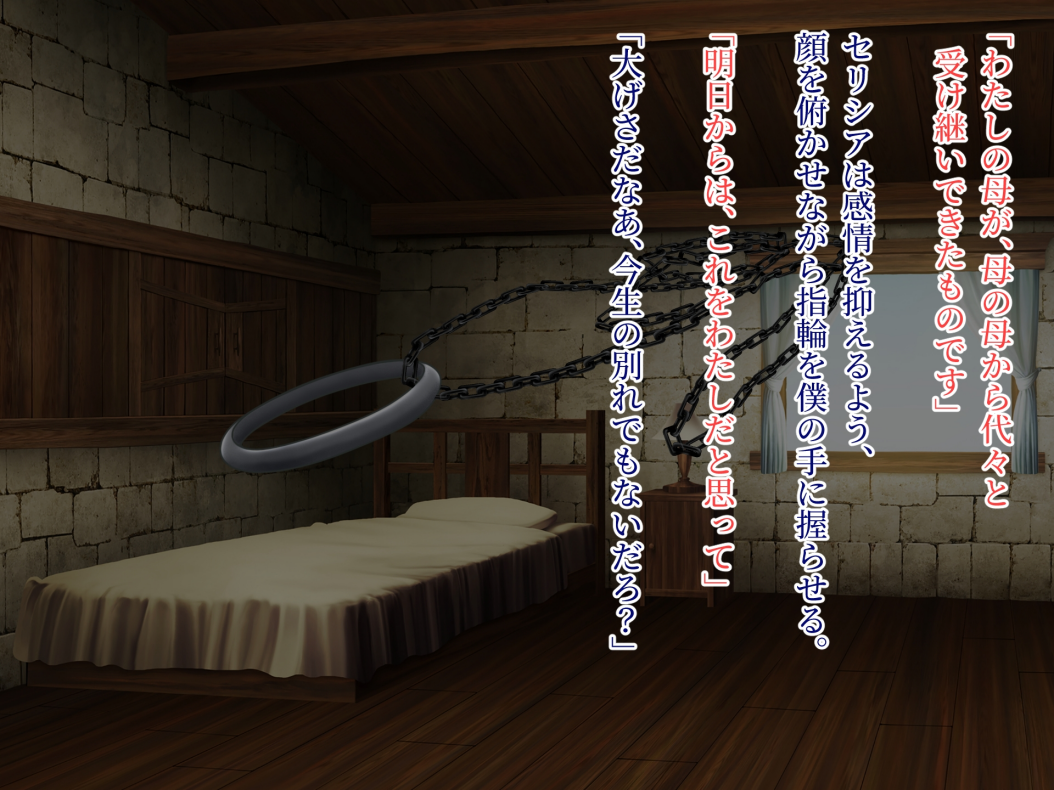

旦那様の……
はぁ はぁ
ぢゃぷっ ぢゃぷっ
ぢゃぷっ ぢゃぷっ


ぐぁぁっ
ぐぁっ
ぐぁぁっ
ぐぁっ
はぁ はぁ
くださいませっ

あっ、ああっ！
ドクッ、ドクッ…


登りつめるように交わされるそれが
頂点へたどり着いた瞬間。
ラスファの中に再び白濁した精液が吐き出された。
ドクッ…
ドクッ…

※
「これは？」
グスカール師の屋敷へ向かう当日。
まとめた荷物を持ち上げようとする僕へ、
鎖を潜らせた指輪をセリシアが差し出した。


「わたしの母が、母の母から代々と
受け継いできたものです」
セリシアは感情を抑えるよう、
顔を俯かせながら指輪を僕の手に握らせる。
「明日からは、これをわたしだと思って」
「大げさだなあ、今生の別れでもないだろ？」

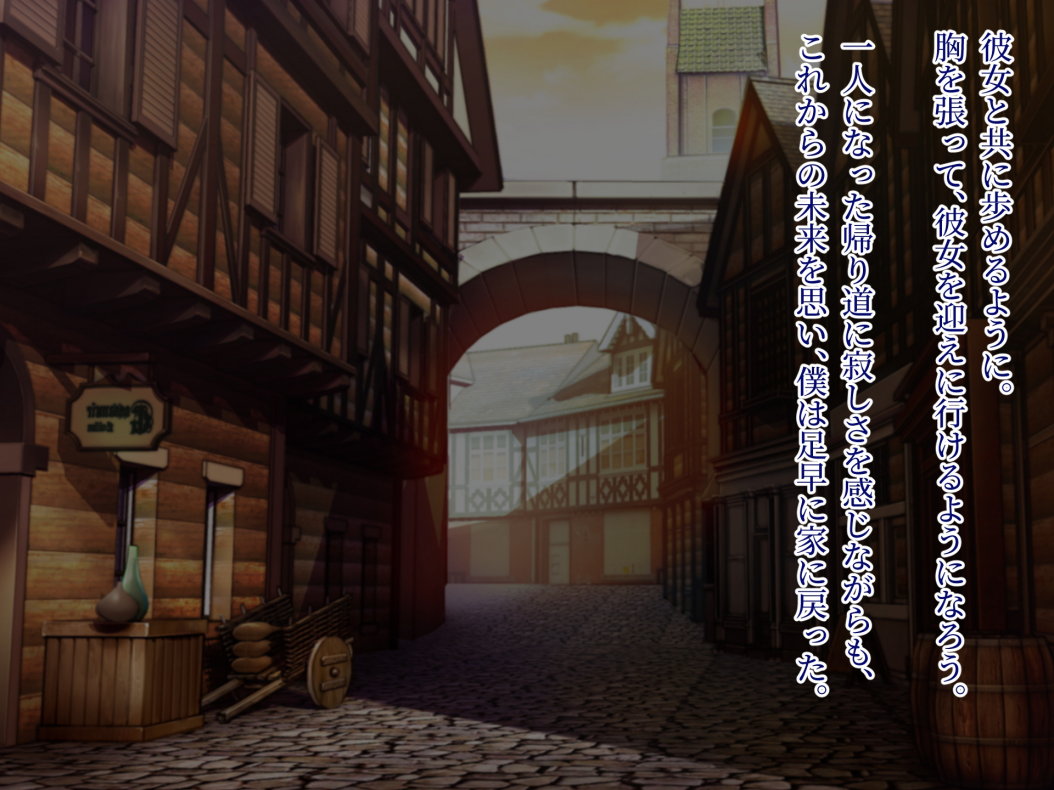
「そうですね、ごめんなさい。
不安だったものだからつい」
「君も学院で学べるようになって、
落ち着いたら一緒になろう」
「ええ……はい。
わたしもその日が来るのを待っています」
僕は彼女を落ち着かせようと、
抱きしめてキスをした。
彼女の方もそれに応えてくれる。
口を離しても僕はセリシアを抱き締め続けた。
服越しであるのに彼女の体の温かさと、
早鐘のような胸の振動を感じる。

「あなた、名残惜しいですがもう出ないと。
今生の別れではないのですよ」
彼女はさっきの僕の言葉で返し、体を離す。
いつもの笑顔を向けて、彼女が戸口の方へ向かった。
「そうだね、ごめん」
そして、二人揃って彼女の家を出て、
師の屋敷への道を歩いた。

道すがらに僕の語る未来の二人を
セリシアは時に笑いながら静かに聞いてくれた。
そして、ついに屋敷の前にたどり着く。
門の前に立った僕たちは、
何とはなしに顔を見合わせた。
「ごめん、しばらくは会えないかも知れない」
協会に所属できることが決まり、
これまでの学院だけの生活とは比較にできない
忙しさを予測して、改めてセリシアに謝る。

「大丈夫です。
進む道が真理につながりますよう祈っております。
頑張ってくださいね、あなた」
申し訳ないと思う僕の気持ちを慮る彼女の言葉に、
僕は思わずその体を抱きしめ、手に触れた。
これまで僕が出会った上流階級の女性とは違い、
細かに傷つき荒れている、
だけど何より温かい柔らかさが僕の手を包む。
「うん、頑張るよ」
彼女の手を握り、返される感触を意識しながら、
僕は体を離す。
「じゃあ、いこうか」
僕たちは手をつなぎ直し、屋敷の門をくぐった。

「お待ちしておりました」
あの時と同じように、
召使の女性が僕たちを迎え入れ、
客間で師と言葉を交わす。
「彼女を宜しくお願い致します」
「うむ、そなたの仕事にも期待しておるぞ」
師との挨拶を済ませた僕は、一人で屋敷を出る。
見送るセリシアの視線を受け止め、
笑顔で頷き返した。


彼女と共に歩めるように。
胸を張って、彼女を迎えに行けるようになろう。
一人になった帰り道に寂しさを感じながらも、
これからの未来を思い、僕は足早に家に戻った。

前編《了》